

78-3

文學士松井知時編



佛蘭西文典

卷上



東京博文館藏版

### 例言

余が本書の編纂を大橋氏に約せしは過る三十一年の夏頃なりき。然るに業務多端の爲め筆を執るに暇なくして翌年の末に及び始めて少閑を得て一時之に着せしも折節外遊のことありて其稿を續くるに由なく爾來之を抛ちしこと又二年。昨十二月二日といふに愈稿を更めて冒頭より筆を起し本日に至りて漸く之を完了するを得たり。起稿より終結まで僅かに七週。苦心の度は時日の短かきに反比せりといへども遺漏誤謬の或は少なからざらんことを恐る。讀者請ふ之を諒とせよ。

一 本書の本來の目的は佛語を知らざる人に其大要を知らしめむとするにあれどやゝ進歩したる人に對しても尙ほ有用なるものたらしめむが爲め普通の小文典に於ては見るを得ざるところまで立ち入りし點も無きにあらず。

一 本書は一面に於て獨習用となり他の一面に於て教科用となるに便せむと欲し從來無きところの法によりて之を編纂せり。

一發音篇の獨習者に必要なるは論を俟たず、良師に乏しき今日に於ては、教課用書としても其が學者を益するところ多かるべきは信ずべき理由あるに似たり、余が比較的多くの紙數を同篇に費やせしむ之が爲に外ならず。

一第二編の第十章は大牀に於てボーリアザンを取れり、されど他書を参考して補ひしところも尠からず、唯時と紙數との許さざる爲め、其單一轉化法を讀者に紹介することを得ざりしは余の尤も遺憾とするところなり。

一本書を編纂するに就て参考せし書は、右に挙げたるボーリアザンの外、アエ、レゼーノエル、バスタン、ラリーヴ、エ、フリューリー、ラルース、サロー、グ、非、非、エ、オー、ギ、ユ、ス、トルメルと共に、ボア、ラ、ヴン、ボア、スト、オル、レン、ドル、フ、オット、ノエル、エ、シ、ア、サ、イルなどなれど、其中負ふところの最も多きはアエ及びレゼーノエルにして、バスタン以下オル、レン、ドル、フまでは之に次ぎ、オットとノエル、エ、シ、ア、サ、イルとは甚だ僅少の部分に過ぎず。

今之を本書の各部に割り當て、考ふれば、ボーリアザンは全く働詞の章に於て、オル、レン、ドル、フは全く名詞の性の部に於て、ボア、ストは主として副詞、前置詞、接

續詞の章に於て、バスタンは尤も多く例に於て、ラリーヴ、エ、フリューリーは働詞及其の他に於て、ラルーズとワロー、グ、非、非、エとボア、ラ、ヴンとは各處に於て、アエとレゼーノエルとは全牀に於て負ふところあるなり。

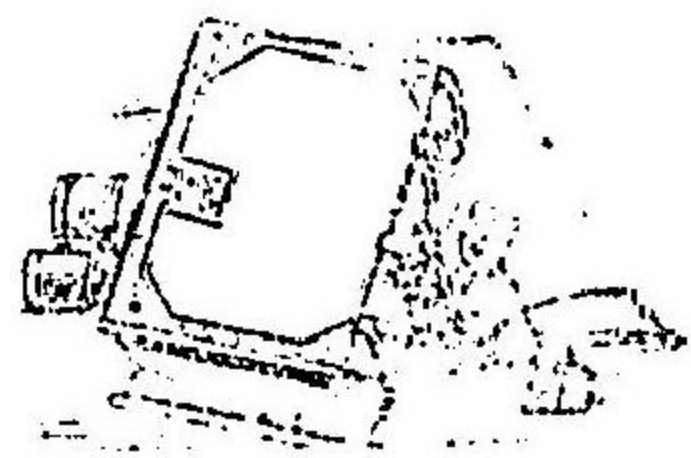
一本書に引用するところの例の大部は右に擧ぐるところの書中に取れりといへども、又コンタンソー、フーゼール、オー、ブ、ラ、ゴン等の「モルソー、シ、ア、マ」及近世の「ロマイン」中より抜きしところもあり、其他「コント、アラマ」より取れるもの一ヶ處、無名の詩人「マダム、アン、ゼル、ベル」の「メゼ、バ、イ、ヴ」より取れる「四句の詩」一あり。

一引用例には盡く其出處作者の名を擧げず煩を厭ひてなり。  
一本書は昨年三月九日佛國文部省より發布せられたる佛語文法改正令を参考して各處に之に關する注意を與へたり。

一讀者は第一編修了の後直ちに第二編の第十章に移り、然る後又第一章に戻りて序を逐うて進むべし、これ編者の切に勸むるところの方法なり。

明治三十五年三月

編者識



# 邦語佛蘭西文典上卷目次

目次	頁
總論	一
言語。文字。文典の定義。言語に伴なふ一定の法則といふことに對する二様の解釋。一般文典。特殊文典。比較文典。文典といふ言葉。文典を書くに就ての標準。文典と修辭學との區別。	
豫備概念(自第一節—至第七十節):七	
一、佛蘭西文典及其標準。二、國語といふこと。三、人の話し又は書く際に用ゆるもの。四、語。五、音及聲。六、字。七、アルファベ。八、アルファベの字數及配列。九、w。一	

○、字の發明。一一、縮句語及佛語。一二、アルファベの分類。一三、母音の數。一四、子音の數。一五、母音。一六、母音音の定義に就て。一七、母音の種類。一八、y。一九、eの種類。二〇、結合母音。二一、母音の表。二二、y。二三、y。二四、母音の表。二五、ラフトング。二六、z。二七、ラフトングといふ語。二八、ラフトングの表。二九、a、e等。三〇、子音の種類。三一、結合子音。三二、子音の區別。三三、h。三四、無聲のh。三五、有聲のh。三六、綴音。三七、一、二、三綴音及多綴音。三八、國字符。三九、國字符の種類。四〇、音節符。四一、量。四二、銳音符。四三、鈍音符。四四、長音符。四五、長短母音。四六、長音符の用。四七、略字符。四八、セラ。四九、雙點。五〇、連線。五一、分線、引用符、括弧。	
---	--

五二、品詞。五三、十品詞。五四、十品詞の區分。五五、變化語。五六、不變化語。五七、定詞或は補充詞。五八、定詞を持ち得る言葉の種類。五九、フライズ及プロボツション。六〇、フライズ中のプロボツション。六一、首字。六二、尾字。六三、ユーフォニック。六四、文法的解剖。六五、論理的解剖。六六、主格。六七、第一格。六八、動詞。六九、資格。七〇、レヅム。

第一編 發音論 …………… 三〇

(自第七十一節—至第九十節)

新定百二十音(七二、一八一)

七二、從來の假名の不都合。七三、命名法の誤り。七四、マ行とバ行とハ行。七五、濁音といふこと。七六、「カキケケ」七七、音聲の企圖。七八、新定百二十音の表。七九、促音。八〇、拗音。八一、百二十音に関する注意九則。

第一章、佛蘭西の「いろは」(八二、一八三)、

八二、アルファベの表。八三、新式と舊式の文字の性。第二章、單子音と單母音との結合(八四、一八五)

第三章、前同題(八六、一八八)

第四章、語尾を發音する單綴音(八九、一九二)

八九、語尾の子音。九〇、第一轉化の動詞の語尾。

第五章、éとòと(九三、)

第六章、長母音(九四、)

第七章、一より二十迄の數字(九五、一九七)、

第八章、アポストロフ、セズユ、雙點、連線、(九八、一〇二)

九八、アポストロフ。九九、iの略せらるゝ場合。一〇〇、セズユ。一〇一、雙點。一〇二、連線。

第九章、iとyと。(一〇三—一〇九)  
一〇三、y。一〇四、i。一〇五、yの二つの動。一〇六、

yがi二つの動をする場合。一〇七、yがi一つの動をする場合。一〇八、pの前のiとyと。一〇九、「イ」と斗り發音するy。

第十章、oとuと。(一一〇—一一二)

一一一、兩母音の間にあるsはz音を發す。

第十一章、兩語の間の發音の連續(一一三—一四)

第十二章、再びu、e、i、nに就て。(一一五、)

(一) aの無音。(二) eの「ア」音。(三) iの無音、nの無音及有無の場合。

第十三章、數字の續き(一一六)

第十四章、結合母音中の鼻音。(一一七—一二〇)

一二七、鼻母音。一二八、uを「オ」と發音する場合。一二九、鼻音を爲さぬ場合。一二〇、鼻音を爲す場合。

第十五章、結合母音、(一二二—一二三、)

第十六章、ゾフトンク(一二四)

第十七章、ゾフトンクの續(一二五—一二六)

第十八章、ゾフトンクの續(一二七、)

第十九章、練習文。(一二八)

第廿章、eとs及dのt音。(一二九—一三三)

一二九、eのs音。一三〇、eのg。一三一、語尾のe。

一三二、sの發音。一三三、dのt音。

第二十一章、結合子音(一三四—一三八)

一三四、eのシャ行音。一三五、eのk音。一三六、eのシャ行音を持つ照。一三七、eのf音。一三八、wの二様の音。

第二十二章、子音g(一三九、一四四)

一三九、gの「ジ」音。一四〇、gの「ガ」行音。一四一、gの「カ」行音。一四二、gの無音、喉音、k音。一四三、gのk

音。一四四、gの無音。

第二十三章、結合子音 *gn* (一四五—一五〇)

第二十四章、子音 *k* (一五一—一五五)

*h* と *gn* と。

第二十五章、*i* と *l* と (一五六—一五九)、

一五七、發音せぬ *i*。一五八、二つの *i* を一つの様に發音する語。一五九、二つの *i* を二つ共發音する語。

第二十六章、*l* の濕音 (一六〇—一六三)

一六〇、*l*、*l*、*l*、*l*、*l*。一六一、*l* の濕音を出す語。一六二、

*l* 音を出す語。

第二十七章、有聲の *h* 及無聲の *h*、(一六四—一七〇)

第二十八章、*Ho* 及び *hon* (一七一)

第二十九章、主音節 (一七二—一七五)

第三十章、發音の連続。(一七六—一八四)、

一七六、一般の規則。一七七—一八四、種々の場合。

第三十一章、前章の續き (一八五—一八九)

一八五—一八九、種々の場合。

第三十二章、例。

注意。

### 第一編 語論……………一〇五

(自第九十一節—至第六百十二節)。

第一章、冠詞(第一九四節—第二五九節)

其定義(一九五—二〇七)。

一九五、諸大家の説。一九六、全上。一九七、レゼー、ノ

エルの定義。一九八、ラエロの説。一九九—二〇四、ノエ

ルの定義の説明。二〇五、*collatif* と *distributif* と *parti-*

〇七、*ノエル* の定義再説。

冠詞の種類(二〇八)

純冠詞(二〇九—二三六)

### (一) 第一級冠詞(定冠詞)(二〇九—二二五)

二〇九、冠詞の三つの形。二一一、截去。二二二、縮合。

其用法。(二二二—二二五)、

二二三、定冠詞を使ふべき一般の場合。二二四、例の比較。

二二五、定冠詞と不定冠詞と殆んど同様に使はるゝ場合。

二二六、定冠詞を使ふべき場合。二二七、*de* のみ使ふ

場合。二二八、*à* のみ使ふ場合。二二九、定冠詞を使ふ

べき他の場合。二二二 *mode* と *à* 字を略する場合。二

二二、例の比較。二二三、固有名詞と冠詞と。二二四、*de*

に續く名詞と冠詞との關係。二二五、佛、英、獨定冠詞の比

較。

### (二) 第二級冠詞(部分冠詞)(二二六—二三六)

二二六、部分冠詞の働き。二二七、部分冠詞の二つの形。二

二八、其變形。二二九、佛、英、獨部分冠詞の比較。

其用法。(二三〇—二三六)

二三〇、部分冠詞を用ゆべき一般の場合。二三一、部分冠

詞と定冠詞の物主格と。二二三、*de* のみを用ゆる場

合。二三三、部分冠詞を用ゆべき場合。二三四、同他

の場合。二三五、*de* のみを用ゆる他の場合。二三六、例

外。

準冠詞(二三七—二四九)即不定冠詞。

二三七、準冠詞の名を與へた理由。二三八、準冠詞(即ち不

定冠詞)を數形容詞と同一視すべからず。二三九、三つの

形。二四〇、佛、英、獨不定冠詞の比較。

其用法(二四一、—二四九)。

二四一、不定冠詞と固有名詞と。二四二、初めて用ゐらるゝ

入又は物の名の前に。二四三、固有名詞の前に。二四四、級

述に力を添ふる爲に。二四五、*est* に續く實名詞の前に。

二四六、*nombre*、*force*、*quantité* 等の語の前に。二四七、

*jours* といふ字を用ゐる際冠詞を抜く場合。二四八、*des*

と *de* 或は *de la* との用法の類似。二四九、否定文中に於

て不定冠詞の代りに *de* のみを用ゆる例。

冠詞の位置及繰返し。(二五〇—二五八)

二五〇、位置に関する一般の規則。二五一、全上。二五二、例外。二五三、繰返しに関する一般の規則。二五四、繰返さない場合。二五五、全上。二五六、隨意の場合。二五七、是非繰返すべき場合。二五八、繰返す必要の無い場合。二五九、練習文。

第二章、名詞(第二六〇節—第三五五節)

其定義(二六一—二六二)

名詞の種類(二六三—二七四)

二六三、名詞の二種。二六四、普通名詞。二六五、固有名詞。二六六、collectif. 二六七、partitif. 二六八、意味の二種。二六九、sens collectif partitif. 二七〇、sens collectif distributif. 二七一、不定名詞。二七二、假用名詞。二七三、單一名詞、及結合名詞。二七四、結合名詞と連続。

名詞の性(二七五—三三二)

二七五、兩性。二七六、男性名詞の語尾と女性。二七七、*e* を付けたのみで女性となる語。二七八、男性の語尾を *esse* に代へて女性としたもの。二七九、*ten* を *linee* 或は *teuse* に代へて女性としたもの。二八〇、*en* を *enne* に代へて女性としたもの。二八一、男女性全く異つた形を持つもの。二八二、語根等しくて語尾の稍々變つたもの。

名詞の性を知る法(二八三—三二五)

第一、意味によつて男女性を知る法(二八三—二九七)

(男性)二八三、男性動物。二八四、日月及季節の名。二八五、風の名。二八六、金屬礦物及色の名。二八七、山の名。二八八、草木の名。二八九、アルファベの字。二九〇、本数及十分数。二九一、全種類を指示する普通名詞。二九二、名詞以外の語を名詞として用ゐた場合。二九三、國郡名及

河名の一部。

(女性)二九四、女性動物。二九五、性質等を表はす抽象名詞。二九六、果實及花の名。二九七、國郡名及河名の一部。

第二、語尾によつて男女性を知る法。(二九八—三二五)

二九八、アルファベ中語尾となり居る字。二九九、*e*。三〇〇、*x* を語尾とする男性と女性名詞。三〇一、男性の語尾とのみなり居る十一字。三〇二、残りの十二字に就て。三〇三、男性の語尾八字。三〇四、*r* を語尾とする語を二分分すべし。三〇五、*eur* 以外に *r* で終る語は男性。三〇六、*eur* で終る語は女性。三〇七、*n* を語尾とする語を二分分すべし。三〇八、*ion* 及び *son* 以外に *n* で終る語は男性。三〇九、*ion* で終る名詞は女性。三一〇、*son* で終る名詞は女性。三一一、*e* を語尾とする名詞を二分分すべし。三一二、*us* で終る名詞は女性。三二三、*us* で終る名詞は女性。三二四、*us* 以外に *e* で終る名詞は男性。三二五、

*e* を語尾とする名詞の類別。三二六、一般の規則。三一七、區別。三二八、語尾の *e* の前に綴く文字の相違によつて名詞を二分分すべし。

三二九、*e* を綴りの最後に持つ男性語尾十二 (*abe, nale, ago, ége, ige, oge, uge, éme, isme, time, aume, aire, eulle*)。三三〇、*age, isme, éme (aume)* を語尾とする名詞は盡く男性。三三一、*abe, nale, ége, eulle* を語尾とする名詞は男性。三三二、残りの五つの語尾に就て。

三三三、*e* を綴りの最後に持つ女性語尾十七 (*ace, anee (anse, enee, ense) nze (ase), ése(ase), ise, nte, nte, ure, ue, ée, ie, lle, nme, nne, nre, sse, lleo*)。三三四、十七の女性語尾に就て。三三五、上に擧げた各語尾に以外に *e* を語尾とする名詞は女性。

意味によつて男性となり又女性となる名詞。(三二六)

結合名詞の性に就て。(三二七、三三一)

三二七、兩名詞の並立する場合。三二八、兩名詞を前置詞が  
聯ねる場合。三二九、形容詞と名詞とで成る場合。三三〇、  
名詞と不變化語と結合した場合。三三一、働詞と連った場  
合。

男性のみ用ゐらるゝ名詞(三三二)

名詞の數(三三三—三五三)

三三三、名詞の數といふこと。三三四、單數と複數と。三三  
五、複數の形。三三六、種類全跡を現はす時の形。

複數を作る法(三三七—三四七)

三三七、一般の規則。三三八、格段な場合。三三九、單數が  
a, x, zで終る時。三四〇、單數が eu, au, 或は eeで  
終る時。三四一、onで終る時。三四二、ieで終る時。三  
四三、ieで終る時。三四四、eとふ語。三四五、  
berenti と détail と。三四六、aland と ciel と air と。

三四七、santの複數。

單數斗りに用ゆる名詞。(三四八)

複數斗りに用ゆる名詞。(三四九)

外國より取た名詞の複數。(三五〇)

結合名詞の複數(三五二)。

固有名詞の複數(三五二)。

不變化語を名詞としたものゝ複數。(三五三)

名詞の用法。(三五四)。

佛語の普通の組立法(三五五)

第三章。形容詞。(第三五六節—第四二三節)

三五六、定義。三五七、形容詞の二種。

確定形容詞(三五八—三九一)

三五八、確定形容詞とは何ぞ。三五九、確定形容詞を五つに  
分つ。

(一)指示形容詞(三六〇)

(二)物主形容詞(三六一—三六二)

三六一、物主形容詞の解と注意。三六二、ses と ses との  
區別。

(三)數形容詞(三六三—三七九)

三六三、數形容詞の意義。三六四、數形容詞の二種。三五  
本數詞。三六六、順序數詞。

本數詞(三六七—三七〇)

三六七、本數詞は變化せず。三六八、凡て男性。三六九、  
vingt と cent と mille と million と milliard と。  
三七〇、vingt, trente, quarante, cinquante, soixante の  
後に百の付く場合。

集合數詞(三七二—三七三)

三七二、集合數詞の解。三七三、作法。三七三、名詞との關係。

倍數詞(三七四)

順序數詞(三七五—三七八)

三七五、順序數の表。三七六、作法。三七七、denxième と  
second との用法。三七八、名詞との關係。  
分數(三七九)

(四)不定形容詞(三八〇—三八八)

三八〇、不定形容詞の意義。三八一、名詞との關係。三八  
二、代名詞として使ふ語もある。三八三、複數に使はぬ語三  
八四、不定形容詞の位置。三八五、名詞の前後何れにも使は  
るゝ語。三八六、位置によつて意味に變化を起す語。三八  
七、働詞の前に ne を取る語。三八八、副詞として用ゐら  
るゝものある語。

(五)接續形容詞(三八九—三九一)

疑問形容詞(三九二—三九三)

性質形容詞(三九四—四一〇)

三九四、定義。三九五、性質形容詞と名詞或は代名詞との關  
係。



三九六、一つの名詞に數個の形容詞の關係する場合。三九七、單數の意味に用ゐられた複數代名詞と形容詞と。三九八、二個以上の名詞に關係する形容詞。三九九、全上の場合に於て男女性の混じ居る時。四〇〇、異りたる曹方。

**形容詞の女性を作る法(四〇一—四〇八)**

四〇一、一般の規則。四〇二、語尾に。な持つ形容詞。四〇三、fで終る形容詞。四〇四、euxで終る形容詞。四〇五、doux, faux, roux。四〇六、e, oi, en, on を語尾に持つ形容詞。四〇七、一般の規則に對する例外。

**形容詞の複數を作る法(四〇八—四一〇)**

四〇八、一般の規則。四〇九、s 或はxで終る形容詞。四一〇、形容詞の複數を作る時は名詞のと略同じ。

**形容詞の位置(四一一—四一七)**

四一一、精確なる規則なし。四一二、普通、名詞の前に置く形容詞。四一四、普通、名詞の後に置くもの。四一五、同上。四一六、形容詞が眞の意味に用ひらるゝ時と比喩的に

用ひらるゝ時と。四一七、位置の前後によつて意味の異なる形容詞。

**形容詞の意味の階級(四一八—四二三)**

四一八、形容詞の意味を三つに分つ。四一九、原級。四二〇、比較級。四二一、比較級の三種。四二二、最上級。四二三、bon, mauvais 及び petit.

**第四章、代名詞(第四二節—第四六一節)**

四二四、定義。四二五、名詞との關係。四二六、代名詞を六つに分つ。

**(一人稱代名詞)(四二七—四三九)**

四二七、人稱代名詞の解。四二八、三つの人稱。四二九、人稱代名詞に用ゆる語。四三〇、其三種。四三一、働詞に付着する人稱代名詞、及直定詞と間定詞との解釋。四三二、直間二定詞の働詞に對して占むる位置。四三三、直間二定詞間の位置の關係。四三四、其二。四三五、je と я と。四三六、人稱代名詞中の je, tu, les と定冠詞とを混同すべから

ず。四三七、代名詞の leur と物主形容詞の leur と。四三八、働詞と隔離する人稱代名詞。四三九、此代名詞の主なる働。

**(二) 指示代名詞(四四〇—四四四)**

四四〇、指示代名詞とは何ぞ。四四一、指示代名詞に用ゆる語。四四二、接近を示す指示代名詞。四四三、隔離を示す指示代名詞。四四四、單に區別のみを示す時。

**(三) 物主代名詞(四四五—四四九)**

四四五、物主代名詞とは何ぞ。四四六、物主代名詞。四四七、名詞との關係。四四八、物主形容詞の notre, votre と

物主代名詞の同じ語との相違。四四九、les tiens, les miens.

**(四) 關係代名詞(四五〇—四五二)**

四五〇、關係代名詞の解。四五二、關係代名詞の二種。

**(五) 不定代名詞(四五二—四五三)**

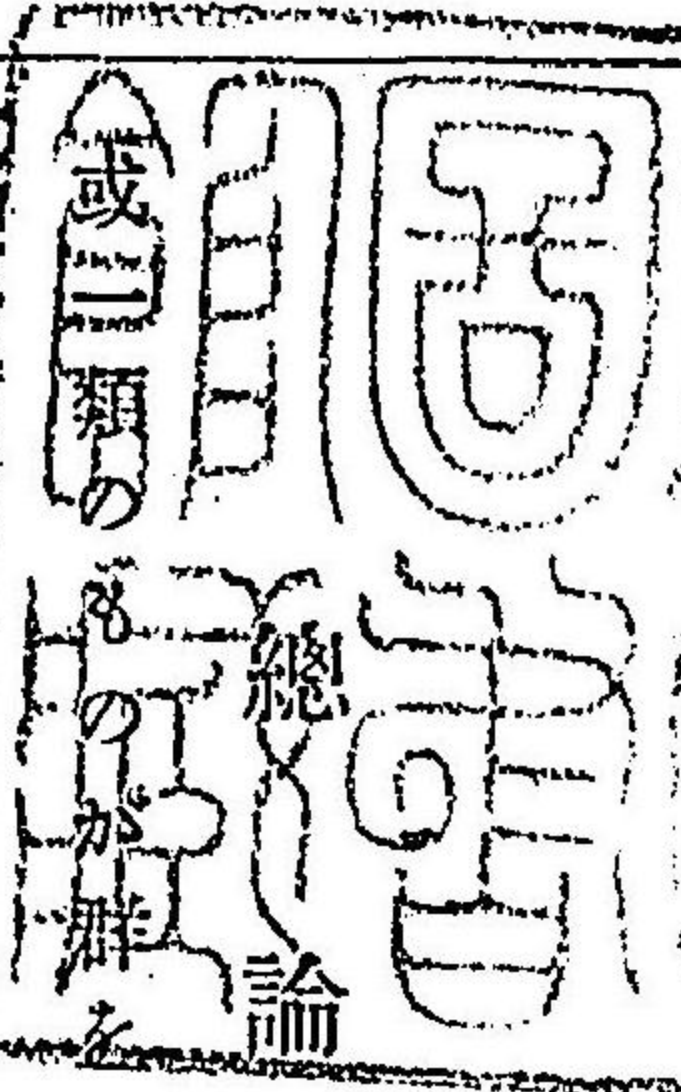
**(六) 疑問代名詞(四五四—四六一)**

人に就て云ふ時用ふる疑問代名詞(四五六)qui, qu'on. 我に就ていふ時用ゆる疑問代名詞(四五九)qui, qu'on.

邦語佛蘭西文典上卷目次畢

邦語佛蘭西文典上卷

文學士 松井知時編



或三類のものがあるが、これをなして互に意志を通ずる必要のある場合には、單純と複雑の相異はあつて、其に相應した一定の言語が生じて來るのである。鳥類や獸類には、彼等に相應した一定の言語があるに相異ない。人類も同じこととて、人類に相應した一定の言語があつて、其媒介によつて相互に意志を通じて居るのである。此言語といふ言葉には二様の意義が附着して居る。即ち、此處に用ゐた如く、或もの思想感情を言ひあらはす言葉を、其長短には關係なく、總稱していふ場合と、或「連続した文章」といふ考へを相手に持て、其を形成る爲めの各分子をいふ場合との二様となるのである。しかし、此第二のものは「言語」といはないで、單に「語」と斗り言た方が宜しからうと思ふ。

人類は又種々の必要に迫られて、口で話すといふことの外に筆で書くといふことを發明して、相應に開けた國では、此筆記といふことが、口語と殆んど同じ位盛んに行はれて居る。其故、人類の多くは、各自の思想感情を言ひわらはすのに口語（即ち口で言ふ言葉）と筆記（即ち筆で書く言葉）との二つの方法を持つて居るといつて宜しいのである。が、此二つのものは方法こそ二様なれ、其源となるところの思想とか感情とかいふことは一つ故、之を同じものと見做して論ずるのが妥當である。であるから、此文典に於ても其區別は立てない積りである。

とはいふものゝ、字若くは「文字」といふことをいふ場合には、口で言ふた言葉でなくて筆に書いた言葉に就ていふのであるといふことは説明するまでもないことである。

扱、人類が各自の思想感情をあらはすに一定の言語を有つとすれば、其言語には必らず一定の法則があるに相違ない。其一定の法則を研究してこれを書きあらはしたものを文典と名けるのである。それ故或學者は「文典」とは言葉の學問である。言ひ換へれば、思想の符號を、其分子、其變形、其組織から考へて、論究する學問で

ある」と述べて居るし、ポーズーなどは一層細かいところまで立入つて、「文典の目的とするところは、思想の種類に準據して之に相應する言葉の種類を定めることである。即ち、思想の種々の變化と其極めて微妙なる差異（*les nuances les plus délicates*）とをあらはす爲に、之に伴なふ言葉の形の變化を指示するものである。つて、其からして又、言葉と言葉との間の關係、及其が思想の結合の爲めに或長さの章句に結合する場合には是非守らねばならぬ規則を指示するものである」と説いて居る。普通の文典には極く短簡に、正しく書き又は話す術を稱して「文典」といふといふ位に書いてある。畢竟極く概括したところが、言語に伴なふ一定の法則を論究して之を記述するものを文典といふのである。

文典といふ語に斯う定義を下して置いて、其から又之に説明を附け加へる必要がある。といふのは、一定の法則といふことの見方である。

一定の法則といふことは、二様に解釋せねばならぬ。即ち第一の解釋は、凡ての言語は思想感情のいひ現はしてあつて、思想感情の活動は常に論理的及心理的規道の外に出ないものであるから、言語も矢張此規道以外に馳することは出来な

いといふ點から見た解釋で、此解釋の下には凡ての人類と其言語とが包括せられて居るので、奈何なる時代に於ても、奈何なる土地に於ても、決して變化することの無い法則を意味して居る。此法則を根柢として造り上げた文典を一般文典 (*grammaire générale*) と唱へて、凡ての國語に應用される文典である。

第二の解釋は思想其物を支配する法則にまで立入らないで、唯筆の先口の外に現はれて来る言語に就て、或一國の人が或思想を言ひあらはす場合には常に奈何に書き又は話すかといふことを研究して、其中の最良と承認せらるる者を標準として、之に伴なふ一定の法則を立るといふ見方で、此見方によつて作られた文典を特殊文典 (*grammaire particulière*) と名けるのである。即ち一般の國民に普通でなく、或一國民斗りに特に適用さるべき文典であるといふ意味で、日本文典とか、佛蘭西文典とかいふのが此である。此特殊文典は國によつて違ふのみならず時代によつて同じいとはいへない。何故といへば、國語は永久に一定の形を保つて居るものでなく、長い間には必らず變遷するものであるから、之に伴なふ文典も同じく變遷するのは必然の結果であるからである。

此處に述べた二種の文典の外に、第三種として比較文典 (*grammaire comparée*) といふを加へても宜し、これは二國若くは數國語の異同を論ずるものである。

文典といふ語の佛蘭西語はグラマール (*Grammaire*) へ、此語は羅句の *grammaia*、希臘の *γρᾶμμα* (*gramma*) から來たので、其本來の意義は畫とか痕跡とか線とか、字とかいふのであつて、或思想を言ひ現はすに字を何かに彫りつけ又は跡をつける術を意味して居たのであるが、遂に今日の様に言語の學問をいふ様になつたのである。

此處に書かうと思ふものは、此特殊文典中の一の佛蘭西文典であるが、少しく注意して置きたいことは、唯完全に思想をいひ現はし得る斗りでは、其を文典の標準と見る譯に行かないといふことと、文典と修辭學とを混同してはならないといふこととである。假令ば、「貴方行く宜しい」とか、「私歸るあります」とか、いふ言葉でも、其言葉を出すに至りたる思想を完全に聞き取るには差支ないが、之れを日本語及日本文典の正しい標準と見る譯には行かない。其と同じく佛蘭西語に於ても、*monsieur tel* とか *madame telle* とか、いふ丈でも其意義を了解するには差支ない。

がこれを正しい言ひ方とはいへない。正しくは之を *monsieur un tel* 及び *madame une telle* と書かねばならぬのである。又 *une heure* と斗りいへばよいところを *une heure de temps* などといふ人がある。これでも意味は聞えぬことは無けれど正しいとはいへないのである。つまり、思想を完全に言ひあらはし得るといふ丈では正しい國語といへず、従つて其國の文典の正しい標準とする譯にはゆかない。文典の正しい標準は其國の公衆、特に知識ある人々が正しいと承認して居る言語でなくてはならないのである。

文典と修辭學との區別は、文典は正しい言ひあらはし方でさへあれば、其言葉に文があらうと無からうと、綺麗であらうと醜なからうと少しも意に介せず、正しいといふことと斗りが目的であるけれども、修辭學の方では、正しいといふことの外に、説述の美麗とか莊嚴とか變化とかいふことを附け加へなければならぬのである。此方では、或意味に於ては、少し位語法に間違がありても左程入釜しくないはないで、辭令に力を與へるといふことに重きを置くのである。尤も、語法の正しいといふことは修辭の方でも望ましいことには相違ないが、其目的が此處

にないといふところが文法と相違する點である。

以上で大體の總論を終つたから、これから文典を學ぶに就て置くべき豫備概念を少しく述べて、然る後本論に取かゝらう。

豫備概念 (NOTIONS PRÉLIMINAIRES)

一、言はずとものことながら、此文典は佛蘭西文典で、佛蘭西文典 (*Grammaire Française*) とは前に述べた通り特殊文典の一であつて、佛國人民の一般に話して居る佛蘭西語を正しく書き又は話す爲めに、其語に特有なる法則を論究するのである。そして其語を正しく書き又は話すことに就て、正しい標準として取らるゝものの中の主なるものは *Dictionnaire de l'Académie Française* 即ち佛國學士會院出版の字書である。

二、日本人が互に用ゐて居る語を日本語といふ如く、佛國人が互に用ゐて居る語を佛國語 (*langue française*) とし、國語 (*langue*) といふは一國に特殊なる話法のことである。

- 三、人が互に話し又は書く際には *sons* 即ち語を用ゐる。
- 四、語は思想 (*ideas*) の符號で之には話す方と書く方との二通りある。話す方は音 (*sons*) から成つて、書く方は字 (*lettres*) から成る。
- 五、音とは或弾力性の物体が震動して其外圍にある弾力性の物假令ば空氣とか水とかいふものに與へる波動が耳に達して、聽覺に印象したるものをいふのである。人にあつては聲 (*voix*) である。
- 六、字とは音の符號で、語を作る要素ではあるけれど、字其物には少しも意味の無いものである。尤も埃及、支那などの文字には多少の意味を持って居ないのは無ければ、此等は象形文字といつて今此處にいうて居るものとは系統の異ふもの故同じく論ずる譯には行かない。それから佛蘭西語の中にでも、*ll* とか *y* とか意味の加はつて居る字はあるけれども、其は本來字として意味があるのでなくて偶然左様用ゐられて居る語と字と同形を取る様になつたのであるから、之が爲めに字に意味があるといふ譯には行かない。
- 七、佛蘭西語に用ゐらるる *a, b, c* などの字を集めたものを *alphabet* (アルファベツ) とす。

- 八、ふ。これは希臘語に用ゐらるる文字の一群の最初の二字即ちアルファ (*α*) ベータ (*β*) から取た語であつて、我國のいろは四十七字を其最初の三字によつていろはと名づけて居ると同じ理である。
- 九、佛蘭西語のアルファベツは凡て二十五字あつて、之を一般に用ゐられて居る通りに配列すれば左の如くである。  
*a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, u, v, x, y, z*
- 十、尙ほ此外に *w* を加へても宜しけれど、*w* といふ字は元來英語又は獨逸語から來た語の中にも用ゐられて、本來の佛蘭西語には無い字故一般にアルファベツの中には加へないのが例である。そして英語から取た語の中では此字は一母音の働殊に *ou* といふ結合母音の働をするし、獨逸語から來た語の中では佛蘭西語の *v* の様に發音されるのである。
- 十一、或人は字の發明を埃及人に歸して、埃及からヘブライに渡りヘブライ人が伊太利に殖民して之をエトリュスク人に傳へ、それから羅馬人に傳はつて字形に變化を起し、之が歐洲各國の字の父となつたが、佛蘭西語も其一つで、羅

馬からゴールに入つたのであると説て居る。其人の説ではアルファベといふのもヘブリーの字の最初の二字から取つたものだといふのである。けれども一般に唱へらるゝところでは文字の發明はフェニシア人に歸すべき名譽で、フェニシアのカドマヌといふ人が文字と書く方法とを希臘人に傳へ、希臘人が伊太利に殖民して之をエトリヌス人へ傳へ、それから羅馬に傳はつて歐洲に擴まつたといふのである。

一、 羅旬語はもと十六字しか無かつたものであるが、後に七字加へて二十三字とした。佛蘭西語ももとは二十三字であつて、其頃は i と j 及び u と v との區別はなかつたが、後に此等の字が別になつて二十五字となつたのである。

二、 アルファベ二十五字を六の母音と十九の子音とにわけける。

三、 六の母音 (Voyelles) は

a, e, i, o, u, y.

四、 十九の子音 (Consonnes) は

b, c, d, f, g, h, j, k, l, m, n, p, q, r, s, t, v, x, z. (z) である。

一五、 母音とは其字自身の中に聲或は音を持つて居るものをいふので、子音とは母音の助けなくては發音することの出来ないものをいふのである。

一六、 母音と子音との定義に就ては大分新しい説があつて、従て其分類法にも別の仕方があるけれども、今は之を掲げず、普通に用ゐられて居るものに從て置く。

一七、 普通母音と唱へる際には、第十三節に掲げた a, e, i, o, u, y の六つか或は其中から y を取り去つた残りの五つをいふけれども、少し精密にいふ場合には此等の母音を單母音 (voyelles simples) と名けて、之に對する結合母音 (voyelles composées) とするものを説かねばならぬ。

一八、 單母音の中 y は單に i と發音さるゝか又は i と i の二つ重なつた發音を持つに過ぎないから之を *いふ* 母音の中に含めてしまふのが適當であるし、

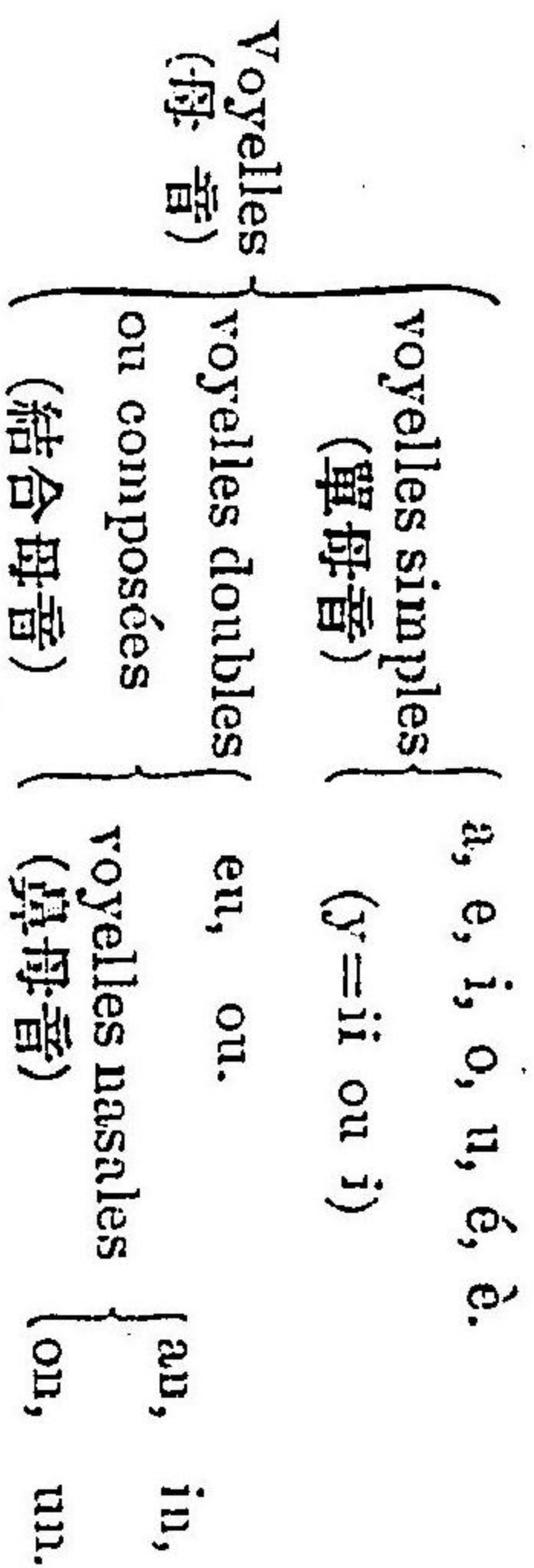
一九、 又 e といふ母音は之を三つに分けて、閉ぢた *e* (l'e fermé) 開いた *e* (l'e ouvert) 及び無聲の *e* (l'e muet) の三つとして、

二〇、 尙之に

二一、

の六つの結合母音を加へれば母音の数は通計十三となるのである。之を表にあらはせば

eu, ou, au, in, on, un.



二三

第十八節に述べた様に純粹な佛語の中では、yは常に二つのiの代用をするのである。假令ば *citoyen* と云ふ語を *citoyien* と發音し *joyeux* と云ふ語を *joieux* と發音する様に。

二三、

又 *hymne, physique* などの様な希臘から來た語だの或は *York* といふ様な語に於ては、yは唯一つのiと同じ發音を持つて居る。

二四、

第二十一節に掲げた十三の母音は之と同音の他の多くの母音を代表して

居るのである。其代表されて居る母音を各母音の下に列記すれば略ぼ左の通りである。

Tableau des Voyelles (母音表)	
Voyelles simples (單母音)	a, ..... au, é.....ai, ei, ey, è, è, e.....ai, i, ..... y, o, ..... au, eau, u, ..... eu.
composées (母音)	eu, ..... ou, œ, ou..... 音(an.....am, en, em, son.



Voyelles (結合)

nasales(鼻)

in, ... im, ym, aim, ain, ein, en.
on, ... om, om.
un, ... um, um.

凡ての綴り及語の發音や説明などは發音篇で精しく述る故同篇を參考するが宜しい。

二五、前數節に述べた母音單母音結合母音の外にヂフントング (diphthongues) といふがある。これは二つ若くは二つ以上の母音が連なりて一發聲で發音されて、それ其各母音の發音が混合しないで判然と聞きわけらるゝものをいふのである。假令ば *Dien* といふ語を發音する際には *i* と *en* とは明かに聞きわけられるにもかゝらば、此二音は同時に一と綴りとなつて出るのである。此時 *iein* はヂフントングを形成つて居るのである。

二六、

此に書いた *diphthongue* の *di* に「チ」の假名を配するのは間違つて居る。けれど

二七、も日本の假名には適當に *ie* の發音を現はすべきものがない故、止を得ず、其音に最も近いと思はれる「ぢ」を配したのである。之に配すべき假名としては、發音篇中の(新定百二十音の中の「ぢ」が尤も正しいから參考して宜しい。  
*Diphthongue* といふ語は希臘の *dis* (二重) と *is* (意) と *is* (語) と *phthongos* (音) と *is* (意) といふ字とを合せて造つた語である。

二八、

ヂフントングを表に現はせば左の通りである。

Tableau des Diphthongues.  
(二重母音の表)

ia, ...	fiacre, naïade, il paya.
ié, ...	pitié, pied, payé.
ie, ...	tabatière, cacuotère.
iai, ...	bréviateur, biasis, je payai.
iei, ...	Saint-Yrieix.
oua, na, ...	pouraere, équateur.

oè,.....poêle, meûle, foerre.  
 ouè,.....foûet, fouetter.  
 ouai,.....ouais.  
 ue,.....êuelle, auel.  
 ni,.....lui, fuir, conduire.  
 oui,.....oui, ouistiti.  
 io,.....pioche.  
 iai,.....tuyau.  
 ieu,.....dieu, adieu.  
 ion,.....Montesquiou.  
 in,.....Carius.  
 ian,.....viande, orogance.  
 ien,.....bien, tient.  
 ion,.....nous avions, rayon.  
 ouen,.....Rouen, Ecouen.

{ ouin,.....sagouin, Bedouin.  
 oin,.....foin, témoin  
 uin,.....Juin.  
 ai,.....aie, Biscaye.  
 ay,.....page, payement.

二九、 以上掲げたもの外、*é, i, ô, û* などあれど此等は獨立の母音と見るべきものでなく、唯 *a, e, i, o, u* の長音を示すに過ぎないものである。

三〇、 通常子音といへば第十四節に掲げた十九字を指せども、之を單子音 (*consonnes simples*) と謂くべしに對して結合子音 (*consonnes composées*) といふもの置くのが適當の仕方である。

三一、 結合子音の主なるものを舉れば左の通りである。

*pl, pr, bl, br, cr, cl, chl, fl, fr, gl, gr,*  
*tr, thir, dr, ch, gp, pl, rh, th, ts, tz.*

三二、 子音は其を發音する機關(鼻齒舌喉等)の相違によつて、鼻音齒音舌音喉音唇音など區別するけれど、左程要用なことでない故精しくは擧げない。

三三、 子音の中hといふ字は少しく毛色の變つた字であつて、通常之を無聲(muette)と有聲(aspiree)との二通りに分けるが、正しく論じた日には、唯呼氣の符號といふ丈に止まつて發音に對する價値のない字であるから子音の列を離して別立さしてもよい位である。

三四、 無聲のhは發音に於ても位置に於ても全く無能で、此hの前の子音と其後の母音とは自由に連結して、h字の無い時と少しも違はぬ發音をするのである。假令ば *l'homme, l'hommeur, le théâtre* の中の h字の様なもので、少しの音もなく、又此字あるが爲めに其前後の字の連結を妨げるといふこともなく全く無いと同じことである。それ故、以上の三語を發音するには *l'omme, l'ommeur. le théâtre* と書いておると同じにすれば宜しい。

三五、 有聲のhの方も殆んど音の無いことは無聲のhと異らないが、唯前のと違つたところは、此方は其hの前の子音と其後の母音との連結を妨げるといふことと

三六、 ある *un héros, enhardir* の二語を發音するには *un. héros, en. hardir* といふやうに發音せねばならないといふ丈が此有聲のhの特色である。

三六、 母音と子音とを問はず、又一字であるとき數字の集合であると論せず、唯一呼氣で發音し得るものを syllabe (綴音)といふ。假令ば *dent* といふ語は唯一呼氣で總てを發音し得るから一綴音であるが、*jardin* といふ語を發音するには *jar* と *tin* との二呼氣を要するから二綴音で、*amitié* といふ字になると *a-mi-tié* と三呼氣を必要とするところより三綴音といふのである。

三七、 一綴音を monosyllabe といふ、二綴音を dissyllabe といふ、三綴音を trissyllabe といふ、數綴音を polysyllabe といふ。

三八、 第六節に述べた通り、字は音の符號で、音を書き現はす爲めに造られたものなれども、唯字斗りでは不充分故、字に又いろ／＼の符しほをつけて發音の際の助けとする。其符を屬字符 (Signes orthographiques) といふ。

三九、 屬字符を細かくわけければ、音節符、略字符、セヂェ、雙點、及連線の五つとなる。  
四〇、 音節符 (Accents) は音の長短廣狹を示す爲のもの、之を又三つに分ける。

- 四二、 此の音の長短廣狹を *quantité* (量) と云ふ。
  - 四三、 音節符の中の第一を鋭音符 (*accent aigu*) と云ふ。これは *l'é fermé* (閉ぢた e) の上に置かれて其音を短かくすべきことを示す。其符は (´) と書く。
  - 四四、 第二は鈍音符 (*accent grave*) を *l'é ouvert* (開いた e) の上に置かれ、其 e の發音を廣くすべきことを示す。符は (̀) と書く。
  - 四五、 第三は長音符 (*accent circonflexe*) を長母音の上に置かれ、發音を長くすべきことを示す。其符は第一第二を結合したものの即ち (ˆ) と書く。
- 發音の際長く引くものを長母音といつて、短かいものを短母音といふ。其一例を舉れば

短	
	patte
	trompette
	petite
	botte
	chute
	il est jeune
	doute

- 四六、 此長音符は長母音の上に置かるゝといふのみでなく、(一) 同形の語の區別の爲めに用ゐらるゝこともあり(假令は *du* と云ふ分詞と *du* と云ふ冠詞とを區別する場合の様) に
  - (二) 或語の收縮を意味することもあり(假令は *age* と書いたものを今は *age* と書く様に)
  - (三) 又子音の除去を意味することもある(假令は *paste, maistre plaict* などと書いたものを今は *pâte, maître, plaît* と書く様に)
- 略字符 (*Apostrophe*) といふは、一母音を略する場合に之に代へて用ゐらるゝ符號をいふので (') と書く。假令は *le homme, la amitié* と書くべきなれども、それでは

長	
n.	pâte
e.	tête
i.	épître
o.	côte
u.	hôte
eu.	le jeûne
ou.	croûte

四八、

o と o, u と u の母音の衝突が起つて音調が快くない故冠詞 l'homme 中の o と n とを略して其代りに此 (o) を用ゐて l'homme, l'ambitie と書く様なのをいふ。  
セディユ (Cedille) は e なる文字の發音を軟らぐる爲の符號である。元來 e といふ文字の次に a, o 若くは u が來るときは e は k の様な發音するのが一般の規則なれども、此場合に其發音を軟らげて、ことさらに s の様な音を出させやうと思ふときに其 e の下に (s) をつけて e とするのである。其符號即ち (s) が セディユである。假令ば facon, francais を「フアン」「フランセー」と讀みたい場合に、其語の中の e の下に此符號を附けて facon, francais と書く様なのをいふ。

四九、

雙點 (Tréma) は二點を並べた符號で (¨) と書く。これは e, i 若くは u が他の母音と重なるとき、此 e 若くは u を明かに區別して發音したい場合に其上に書くのである。假令ば naïf を naï-ff と發音したい場合に naïf と書き saul を sa-ll と發音したい場合に saul と書く様なのである。

五〇、

連線 (Trait d'union) は chef-d'oeuvre とか sur-le-champ とか いふ様に、數字を合して唯一つの意味を形成る場合に其各語を連結する (-) なる符號をいふのである。

五一、

以上列擧した諸符號の外に尙ほ分線 (trait de séparation 又は tiret) といふものがあつて對話の際話し手の變化を示すし引用符 (guillemets) といふがあつて、或文章の一句若くは數句數節を引用した際或は或言語を其儘直寫した際などに其始めと終りとに附するものもあるし、又括弧 (parenthèse) があつて、一文中に或異なつた意味を記入する際に之で取圍むといふことがある。分線の符號は (—) で連線よりも長い。引用符の符號は (") で括弧の符號は ( ) である。

五二、

シカン、此等の者は屬字符でない。正しくは句點法の中に論ずべき者である。品詞 (Parties du discours) 奈何なる國の言葉でも、其言葉をよく調べればいろ

五三、

くの種類からなつて居る。其言葉の種類を品詞と名ける。佛蘭西語には十品詞あつて、凡ての佛蘭西語は皆其中に含まれて居るのである。其十品詞は左の通りである。

- 1. Le nom 名詞
- 2. L'article 助詞

- 3. L' adjectif 形容詞
- 4. Le pronom 代名詞
- 5. Le verbe 働詞
- 6. Le participe 分詞
- 7. L' adverbe 副詞
- 8. La préposition 前置詞
- 9. La conjonction 接續詞
- 10. L' interjection. 間投詞

五四、此等の十品詞を大きく分けて二類とし、其一つを變化語といつて使ふ際に變化を起すものを此中に入れ、他を不變化語といつて使用の際に變化を起さないものを此中に含める。

五五、變化語 (mots variables) は

- le nom (名詞), l'adjectif (形容詞), le verbe (働詞),
- l' article (冠詞), le pronom (代名詞), le participe (分詞).

の六つで

五六、不變化語 (mots invariables) は

- l' adverbe (副詞), la conjonction (接續詞),
- la préposition (前置詞), l' interjection (間投詞)

の四つである。

五七、文法語の中に Compléments (定詞或は補充詞)と云ふ言葉がある、これは、或他の語の意味を完全にするか又は其を確定する時に用ゐらるゝ言葉で、例令ば、*la beauté* と云ふ語があるとして、何の *beauté* だかわからぬ、之に *d'une femme* と云ふ語を加して *la beauté d'une femme* とすれば、其 *beauté* は *femme* の *beauté* である、と云ふことが確かにわかるのである、斯る場合に於て *femme* は *beauté* の *complément* べ *beauté* と云ふ語が此 *femme* と云ふ *complément* べ意味を完全にされたのである。

五八、斯様な *complément* を持つことの出来る言葉は唯名詞、形容詞、代名詞、働詞、分詞、副詞、前置詞の七品詞斗りである。

五九、

又フラーズ (phrase) と云ふ言葉と、プロポシション (proposition) と云ふ言葉がある。フラーズとは一の完全な意義を形づくるところの言葉の集合をいふのであつて、プロポシションとはフラーズの中の各部分を指していふのである。例令ば、

*La calomnie est toujours l'arme des envieux,*

といふ文章があるとせよ。此文章は一つのプロポシションから成つて居る一つのフラーズである。即ちプロポシションとフラーズと一致したものと見て宜しい。又

*Calypso se promenait souvent seule sur les gazons fleuris dont un printemps éternel*

*bordait son île; mais ces beaux lieux, loin de modérer sa douleur, ne faisaient que*

*lui rappeler le triste souvenir d'Ulysse, qu' elle y avait vu tant de fois auprès d'elle.*

といふ文章があるとすれば、これは四つのプロポシションから成つて居る一つのフラーズである。

六〇、

一つのフラーズの中に含まれて居るプロポシションの數を知りたいと思はば、其フラーズの中にある表人稱的働詞(即ち主格に一致する働詞のこと)と前に擧げた二文章の中にイタリックで書いてあるやうな働詞の數を算へ

ればわかる。何故といふに一つのプロポシションは必らず一つの表人稱的働詞を持って居るからである。

但し、時とすると此働詞は書いて無いことがある。けれども、其様な場合には、文勢を見れば其働詞の略されて居ることを容易に知り得るのである。

又此働詞の中に不定法 (infinitif) を算入してはならない。

六二、  
豫備概念として述ぶべきことは大抵終へたけれど、初學者の便利の爲めに今少し文法上の言葉を説明して置かう。

Initiale (音字) 一語の初めに書かるゝ字をイニシアルといふ。Jean といふ語のイニシアルは J といふ語のイニシアルは m である。

Finale (尾字) 一語の終りに書かるゝ字をフナルといふ。mot といふ語のフナルは t といふ。chef のフナルは f である。

六三、  
Euphoniques 發音を一層軟かにし滑かにするものをユーフォニクといふので、假令ば si Ton vient 中の i や viendra-t-il 中の t などユーフォニクである。何故といふに、此等の二語の中の i と t とは唯口調を善くする爲めに挿入せられ

たもので、意味には少しも關係しないものだからである。

六四、Analyse grammaticale (文法的解剖)。これは、或文章を捕へて、之を其文章を構成して居る、いろ／＼の言葉にわけて、これは冠詞だ、之は名詞だ、之は働詞だといふやうに文法的の名稱を與へることをいふのである。

六五、Analyse logique (論理的解剖)。これも或文章を解剖することは文法的と相違なけれども、唯其わけ方が違ふのである。これは前の様に冠詞だ名詞だなどわけないで、其文章の各部分を主格、賓格、働詞などにわけるといふのである。

六六、Sujet (主格)。これはプロポジション中の語で、之に就て或事を断定し、或は否定するものをいふのである。

六七、Nominatif (第一格)。大抵は働詞の前に置かるゝ語で、之をプロポジションの主格と云ふ。

六八、Verbe (働詞)。これはプロポジション中の一部で、主格の爲したること、主格の受けたこと、或は單に主格の有様、性質等を表はす言葉で、人稱、數、時、及格に隨て變化するものをいふのである。

六九、Attribut (資格)。これは、一つのプロポジションの主格に就て、或は断定し、或は否定するところのものをいふのである。

Dieu est juste と云ふ文章に於ては、Dieu は主格で、est は働詞で、juste は attribut である。

七〇、Régime (ラット)。これは、直接に一つの働詞又は前置詞に屬して其意味を補充するものをいふ。假令は servir Dieu avec ferveur と云ふ文章に於て Dieu は servir のラットであるし、ferveur は前置詞 avec のラットである。(Complément と同義)



### 第一編 (Première Partie)

#### 發音論 (Prononciation.)

七一、  
 筆に據つて或一國語の發音を他の國に紹介するといふことは容易のことでない。特に不完全な日本の假名で佛蘭西語の發音を示すことは殊に困難極まる事業である。それ故吾輩は先づ現時行はれて居る五十音を解剖して其列を正しくし、其上從來無いところの假名をも創造して、彼國の音を表はすには稍近いものにしやうと思ふ。そして斯くして出來上つたものに「新定百二十音」の名を附けて置くつもりである。

#### 新定百二十音。

七二、  
 新定百二十音の表を書く前に、少しく從來の命名法の誤まつて居ること、「サ行」「タ行」「ハ行」等に異種類の音の混合して居ることを述べたいと思ふ。  
 今先づ命名法に就て論じて見やうならば、從來は「ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ」の各行と、「シ」とを清音と唱へ、「ガ、ザ、ダ、バ」の各行を濁音と唱へ、「バ」行を半濁音を唱へて居

七三、

たものである。けれども此「バ行」を半濁音と呼ぶのが誤まつて居る。これは唇の硬音で純粹な清音である。それ故、口に屬する諸機關斗りて發音するものを假に口腔音と呼び、尙此外に鼻腔をも用ゐるものを鼻音と唱へて、從來の五十音を其儘に分類すれば。

音	清音	腔	口
ア行……ア、イ、ウ、エ、オ。	カ行……カ、キ、ク、ケ、コ、	サ行……サ、シ、ス、セ、ソ。	タ行……タ、チ、ツ、テ、ト。
ハ行……ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。	ヤ行……ヤ、イ、ユ、エ、ヨ。	ラ行……ラ、リ、ル、レ、ロ。	ワ行……ワ、ヰ、ウ、ヱ、ヲ。
バ行……バ、ビ、ブ、ベ、ボ。	ナ行……ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ。		

(此行を清音の中に入れた事に注意せよ)

鼻音	マ行……マ、ミ、ム、メ、モ。
音	ン行……ン。

口	ガ行……ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ。
腔	ザ行……ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ。
濁音	ダ行……ダ、ヂ、ヅ、デ、ド。
音	バ行……バ、ビ、ブ、ベ、ボ。

鼻音	カ行……カ、キ、ク、ケ、コ。
----	----------------

(此行は各假名の右肩に唯一點を加へたもの)

となる。

何故に從來「バ」行を半濁音として「ハ」行と共に「ハ」行に縁故あるものゝ様に考へて居たかといふに、これは「バ」行「ハ」行共に「ハ」行の字を借りて其音を表はしたからに相違ない。しかし、これは非常な誤りである。「バ」行は前にも述べた通り唇の硬音で、純然たる清音である。歐洲語に用ゐらるゝ字の中に此比較を求めれば、英佛獨語の P に相當するのである。然るに「ハ」行は元來呼氣を表は

七四、

七五、

す丈の字で之に對する濁音も半濁音も出しやうは無い。其故、「ハ」行は「バ」行とは關係が無い如く、「バ」行とも關係はない。「バ」行は歐洲語の B に相當する字で「ハ」行の濁音である。或音が或音の濁音であるといふに要する大切な條件は其發音の際に形成る口腔、舌唇等の形狀が等しくあらねばならぬといふことである。「ガ」行と「カ」行、「サ」行と「ハ」行、皆其形狀が等しいけれども、「バ」行と「ハ」行とは九で違ふことは誰にでもわかる。此事實を考へれば、前節に述べたことは明かに解されるであらう。

七六、

前の表の中に「カ、キ、ク、ゲ、ゴ」といふを加へた。これは「ガ」行を鼻にかけて發音するとき起る音で、カ、キ、ク、ヒス、加賀カカ、小川(チカハ)などの中にある。「ク」などがこれである。九州地方に行くと此音は無く、凡て「ガ」行斗の様なれど、「カ」行を發音する際に鼻腔をも用ゐれば此音の出ない筈はないのである。

次に吾輩は種々の行を解剖して、其各行中に含まれて居る異種の音を別の行に移し、其と同時に將來無い假名をも創造して、其發音を讀者に明示したいと思ふ。

七七、

けれど音は元來口に言ひ得て筆に表はせないことであるから思ふやうに行かないのは實に遺憾である。けれども各行を規則正しく配列して置けば他の行とのアナロジ（類似）によりて略ぼ推測し得られないこともなからうと考へる。それら凡ての假名に一々羅馬字を配して置くから、正しい發音を知るには一層便利であらうと思ふ。

七八、

新定百二十音の表

此表の中に納むる假名の數は百二十六なれど、便利の爲百二十音と名けたのである。

此百二十音に於ては、「サ」行、「ツ」行を各二列にわけ、「タ」行、「タ」行を各三列にわけ、「ナ」行と、「ハ」行とを各二列に分け、新たに「ヅ」行を加へた。

(行各の種)	母音	子音
ア行……	ア イ ヲ	カ キ ク ケ コ
	(a, i, u, e, o)	(ka, ki, ku, ke, ko)
	ガ	ギ
	グ	ゲ
	ゴ	

口	腔	音
サ行……	タ行……	ハ行……
サ (sa, si, su, se, so) = ザ (za, zi, zu, ze, zo) シ (sha, shi, shu, she, sho) = ジ (ja, ji, ju, je, jo)	タ (ta, ti, tu, te, to) = ダ (da, di, du, de, do) チ (cha, chi, chu, che, cho) = チ (cha, che, chu, che, cho) ツ (tsa, tsi, tsu, tse, tso) = ツ (dza, dzi, dzu, dze, dzo)	ハ (ha, hi, hu, he, ho) = …………… フ (fa, fi, fu, fe, fo) = ヴ (va, vi, vu, ve, vo)
ヤ行……		
ヤ (ya, yi, yu, ye, yo) = ……………		
ラ行……		
ラ (ra, ri, ru, re, ro) = ……………		

フ行	フ	非	ウ	エ	オ		.....
	(fa, vi, vu, ve, vo)						
ハ行	ハ	フ	プ	ハ	ホ		.....
	(pa, pi, pu, pe, po)						
ナ行	ナ	ニ	キ	ニ	キ		.....
	(na, ni, nu, ne, no)						
	ナ	ニ	キ	ニ	キ		.....
	(nya, ny, nyu, nye, nyo)						
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ		.....
	(ma, mi, mu, me, mo)						
ン行	ン		.....				
	(n)						
		ガ	キ	シ	ケ	ト	.....
		(nga, ngi, ngu, nge, ngo)					

七九、右掲げた各假名の右の下の方に小さくツを書けば促音を表はす。假令ば全(マツタシ)、立腹(リップシ)

八〇、又右に掲げた百二十音の第二列の假名の下に小さくヤ、ユ、ヨを書けば拗音を表

はす。假令ば

キヤ キユ キヨ      チヤ チユ チヨ  
 ラヤ ラユ ラヨ      ツヤ ツユ ツヨ  
 スヤ スユ スヨ      シヤ シユ シヨ      等。

八一、第七十八節の百二十音に関する注意。

**注意一。**——百二十音に添へたる羅馬字は英語の綴りでもなく、佛語の綴りでもなく、従來行はれて居る羅馬綴りに自己流を少し交たものである。

**注意二。**——「ヤ」行の「イ」と「エ」とは「ア」行のものよりも舌根を余計に隆めて、發音に力を入れるべきなれども、之が爲めに特に假名を製へるほどの必要もないと認められた故「ア」行の假名を其儘に用ゐて置いた。

**注意三。**——「ワ」行は、ワ、ウ、イ、ウ、エ、ウ、オといふ様に、どこまでもワの性質を帯びた發音を必要とする。

**注意四。**——「ラ」行は「L」に相當する故、別に「L」に相當する行を設けやうかと思ふたけれど、可成新らしい假名を製らない様にと思ふところから止めた。

注意五。——新定の「タ」行は凡て舌の尖端斗りを、上顎の前端に觸れさして發音せねばならぬ。

注意六。——「フ」行の發音は誰でも上下唇斗りて發音するものゝ様に心得て居るらしいが實際は上齒と下唇とを用ゐる方が多い試みに「福井縣」二見浦「船方」冬枯などいふ言葉を何心なく發音する様を考へて見るがよい。上齒と下唇を用ゐる方に近い形を口が取るではないか。此方は斯う定めて置いて、扱是に對する濁音はといふと、どうしても「フ」行である。「バ」行が此行に對する濁音でないことは第七十四節と五節とに述べたところて明かであるし、「ワ」行に濁音の無いことも其發音の際の口の形でわかるのみならず、佛蘭西語に於て、fがvに移り行く例は數へ擧げられぬ位である。「ワ」行の發音は下唇の内の方へ上齒が極く軽く殆んど觸れない位に觸れて居るのが呼氣の出ると同時に離るゝ時起る音である。「フ」行の發音も同じ口の形で出来る。fのvに移り行く佛語の例

instructif.....instructive, sauf.....sauve,

attentif.....attentive, bref.....brève,  
maladif.....maladive, naïf.....naïve. etc.

注意七。——注意六に述べた通り故「ワ」行を表はすに「ラ」行の假名を借るのは悪いと信じたけれど、此假名は今では大分に用ゐられて居るやうだから、新たに作るより便利が多いと思つて之を用ゐることにした。

注意八。——「ハ」行に對する歐字はhであるが日本人は「ハ」行を明かに發音する假令ば春、兵隊、星などのハハハの様にけれども、佛國人は殆んどhを發音し得ないので尤も聞き取ることも六ヶ敷い。「ハ」行を「ア」行と同じ位にしか發音しない。homme, le hérosなどいふ字を發音するにも「オム」「ル」「エロ」といつて「ホーム」「ル」「ヒロ」とはいはない。それ故佛蘭西語には「ハ」行が無いと心得て居て大した過ちは無いのである。

注意九。——「ン」といふ字は純粹な鼻音で、歐字のn、或はmに相當するものは誰も考へて居ること、其に相違もなければ、極く精密に言へば、此「ン」に對する日本人の正確な發音はn又はmより重い故、我等の發音を歐人に筆記

さすれば十中の八九迄は品と書く。即ち「門」蘭などの發音に對しては大抵 nous, rang と書くのである。特に佛蘭西人の發音は軟かて鼻にかゝること多い故、佛蘭西語の n m の發音は我「ん」の(正確な)發音に遠いこと獨逸語或は英語よりも甚だしいと思つて居なければならぬ。それ故、獨逸語の kunst を「シンスト」と發音し、英語の member を「メンバー」と發音するは宜しい。けれども佛蘭西語の tendre や chambre を「タンデル」「シャンブル」と明かに「ん」を擧かして發音するは拙である。尤も、斯く發音したからとて意味が通じないといふのではないが、唯佛蘭西人の固有の發音に遠くなるといふのである。然らば、どういふ風に發音してよいかといふに、tendre の方は「タン……」といはず、「ター……」といつて稍々之に「ん」の心持を添へる位に止め、chambre の方も「シャ……」といはず、「シャ……」に「ん」の心持を添へる位の發音をする方がよい。「ん」の心持を添へるといふは、つまり鼻にかけるのである。それ故此二つの語は「ターブル」と「タンデル」との中間「シャーブル」と「シャンブル」との中間の鼻にかゝつた發音をするものと心得れば宜し。

斯様な説明は一語毎に繰りかへすことが出来ないから、以後 n や m に出くわしても常に唯「ん」と斗り書いて置くから、讀者の方で、今述べた様な新發音を之に與へて戴きたい。つゞめていへば「ん」の發音を本來よりも一層廣く漠とした風にすればよいのである。

○第一章 佛蘭西の「しろは」

(Alphabet français)

スニ、佛蘭西の「しろは」(アルファベット)と其發音とは左の如くである。

字	音		讀方		例
	大イ 小イ 字字ク	天然音	變化音	新讀方	
A a a	ア		ア	ア	Arabe (アラブ)
B b b	ブ		ブ	ベ	Babel (バベル), abside (アブシド)
C c c	ク	ク	ク	ク	Cucur(カカオ), Ceci(セシ), second(セコン)

D d	ヅ	ク	ヅ	ヅ	<i>Dada</i> (ダダ), <i>grand homme</i> (クラントム) <i>élève</i> (エルーヴ), <i>sévère</i> (セヴェール) <i>fanfaron</i> (ファンファン), <i>nerf ans</i> (ヌーヴン) <i>gagé</i> (ガセ), <i>rang élevé</i> (ランカルク) <i>héros</i> (エロ) <i>il</i> (イル) <i>Japon</i> (ジャポソ) <i>Kan</i> (カン) <i>lis</i> (リス) <i>nanan</i> (ナンナン) <i>nanan</i> (ナナン) <i>Onomatopée</i> (オノマトペ)
E e	ウ(エ)		ウ(エ)	エ(エ)	
É é					
Ê ê					
È è					
F f	フ	フ	フ	フ	
G g	グ	グ	グ	グ	
H h	ハ		ハ	ハ	
I i	イ		イ	イ	
J j	ジュ		ジュ	ジュ	
K k	ク		ク	カ	
L l	ル		ル	ル	
M m	ム		ム	ム	
N n	ヌ		ヌ	ヌ	
O o	オ		オ	オ	

P p	プ		ピ	パイ	<i>papa</i> (パパ) <i>Coq</i> (コク) <i>carre</i> (カール) <i>sésame</i> (セザム) <i>Titan</i> (チタン), <i>action</i> (アクション) <i>usuel</i> (ユースユル) <i>vivement</i> (ヴィヴァン) <i>axe</i> (アクス), <i>œil</i> (ユグール), <i>excess</i> (エクセス), <i>deuxième</i> (ドゥイユム) <i>type</i> (タイプ), <i>mogent</i> (モグヤン) <i>Zizanie</i> (ズザニー)
Q q	ク		ク	ク	
R r	ル		ル	ル	
S s	ス		ス	ス	
T t	タ		タ	タ	
U u	ウ		ウ	ウ	
V v	ヴ		ヴ	ヴ	
X x	ク		ク	ク	
Y y	イ		イ	イ	
Z z	ズ		ズ	ズ	

八三

新式では凡ての文字を男性とすれど舊式では其中の十八字を男性として残り  
の七字を女性とする。即ち  
une f, une h, une l, une m, une n, une r, une s.

第二章 單子音と單母音との結合

(Consonnes simples accompagnées de voyelles simples)

八四	bu (ブ), bué (ブエ),	bi (ビ), bè (ベ),	bo (ボ), bé (ベ),	bu (ブ), bù (ブ),	by (ビ), bè (ベ),
	ca (カ), ca (カ),	ci (シ), cè (セ),	co (コ), cò (コ),	cu (ク), cù (ク),	cy (シ), cè (セ),
	da (ダ), da (ダ),	di (ジ), dè (ゼ),	do (ド), dò (ド),	du (ヂ), dù (ヂ),	dy (ジ), dè (ゼ),
	fa (ファ), fa (ファ),	fi (フィ), fè (フェ),	fo (フォ), fò (フォ),	fu (フ), fù (フ),	fi (フィ), fè (フェ),
	ga (ガ), ga (ガ),	gi (ジ), gè (ゼ),	go (ゴ), gò (ゴ),	gu (グ), gù (グ),	gy (ジ), gè (ゼ),
	ha (ハ), ha (ハ),	hi (ヒ), hè (ヘ),	ho (ホ), hò (ホ),	hu (フ), hù (フ),	hy (ヒ), hè (ヘ),
	ja (ジャ), ja (ジャ),	ji (ジ), jè (ゼ),	jo (ジョ), jò (ジョ),	ju (ジュ), jù (ジュ),	ji (ジ), jè (ゼ),

八五

前節の母音と子音の位置を轉倒して讀み

ab (アブ) ab (エブ), ib (イブ), ob (オブ) ub (ウブ) yb (イブ),  
 ac (アク) ec (エク), ic (イク), oc (オク) uc (ウク) yc (イク),  
 ad (アド) ed (エド), id (イド), od (オド) ud (ウド) yd (イド),  
 等となる。

第三章 前同題

八六

ma (マ), mé (メ),	mi (ミ), mè (メ),	mo (モ), mò (モ),	mu (ム), mù (ム),	my (ミ), mè (メ),
na (ナ), né (ネ),	ni (ニ), nè (ネ),	no (ノ), nò (ノ),	nu (ヌ), nù (ヌ),	ny (ニ), nè (ネ),
pa (パ), pé (ペ),	pi (ピ), pè (ペ),	po (ポ), pò (ポ),	pu (プ), pù (プ),	py (ピ), pè (ペ),



入セ  
子音と母音との位置を轉換しテ

ru (ラ)	re (ル)	ri (リ)	ro (ロ)	ru (ル)	ry (リ)
sa (サ)	se (セ)	si (シ)	so (ソ)	su (シュ)	sy (シ)
ta (タ)	te (テ)	ti (チ)	to (ト)	tu (トゥ)	ty (チ)
va (ヴァ)	ve (ヴェ)	vi (ヴィ)	vo (ヴォ)	vu (ヴ)	vy (ヴィ)
xu (クハ)	xé (クエ)	xi (キシ)	xo (クソ)	xu (クシュ)	xy (クシ)
za (ザ)	ze (ゼ)	zi (ズ)	zo (ゾ)	zu (ズ)	zy (ズ)
am (アム)	em (エム)	im (イム)	om (オム)	um (ウム)	ym (イム)
an (アン)	en (エン)	in (イン)	on (オン)	un (ウン)	yn (イン)
ap (アプ)	ep (エプ)	ip (イプ)	op (オプ)	up (ウプ)	yp (イプ)
ar (アル)	er (エール)	ir (イル)	or (オル)	ur (ウル)	yr (イル)

1.

入セ  
第二語の語

as (アス), ... at (アト), ... av (アヴ), ... ax (アクス), ... az (アズ), ...

1. Papa a le baba. 2. Le daïn est la (此文中の est の中の st は讀まぬ字で唯 e 斗りを發音するのである)。
3. Je lis ce mot : bébé. (此文中の lis の s と mot の t とも發音せず)。
4. Tata a le gigot et le bébé a le baba. (此文中の gigot と et との語尾の t も讀まず)。
5. Tu as la FA. (此文中の as の語尾の s も發音せず)。
6. Je rit a le baba. (rat の語尾 t 發音せず)。
7. Le bébé a su dire : non, ma, mes, (mes の語尾の s は發音せず)。

une (ウネ)	un (ウン)	une mare (マレ)	une mère (メレ)	nuire (ヌレ)
dem (デム)	orbite (オリビテ)	ami (アミ)	paradoxe (パラドゼ)	sécurité (セキユリ)
ri (リ)	riminé (リニメ)	monotone (モノトネ)	renné (レヌエ)	popularité (ポピュラリテ)
(po-pu-la-ri-té)				

### 第四章 語尾を發音する單綴音

(Monosyllabes à finale sonore.)

八九、語尾にある子音は發音しないのが普通なれど、*o* と *f* と *r* とは大低發音す。  
九〇、シカシ、Couper(シーパー)、marcher(マルシャール) aller(アランノ)などの様に第一轉化  
(première conjugaison) の動詞の語尾のは發音しなす。

九一、	bac, バク	bec, ベク	oil, ワイル	bol, ボール	dur, デュール	Cyr, シール
	bal, バル	mer, メル	fil, フィル	sol, ソール	mur, ムール	Lys, リス
	Car, カール	ver, ヴェール	vif, ヴィーフ	roc, ローク	suif, スイーフ	Tyr, ティール

例

1. Le bac est(エ) sur le lac(ラック).
  2. Le bac est(エ) plat(プラ).
  3. Le sac(サク) est sec(セ).
  4. Ce fil est fort(フォル).
  5. ver est mort(メル).
- (mot の語尾の t は發音せず)。語尾の t は發音せず。

6. Ce roc est dur.
7. Ce sel est pur(プル).
8. Ce frac(フラック) est vert(ヴェール).
9. Ce bol est vide(ヴィ).
10. L'air(エアール) de la mer est vif.

### 第五節 閉音節

(L'è fermé, l'è ouvert et l'è muet.)

1. Où(ウ) est le dé(テ)?—Le dé est avec(アヴェック) la clé(クレ).
2. Où as-tu été?  
(ウー ヲ ヌ エテ)?—J'ai(ゼー) été à Passy(パッシー).
3. As-tu été dans(ダンス) le pré(プレ)?—Non(ノン), j'ai été sur le lac.
4. Où est le berger(ベルジェ)?—Il(イール) est dans(ダンス) le verger(ヴェルジェ).
5. Arrivez(アリヴェ) vite(ヴィ).
6. Ce blé est très(トリス) sec.
7. Où est son(ソソ) père(ペール)?—Il(イール) est tout(トゥト) près(プレ).
8. mou(モウ) frère(フレール) est là(ラ).
9. Où est la mère(マール)?—Elle(エール) est dans(ダンス) le parc(パーク).
10. Ce papier(ペピエ) est très(トリス) léger(レジェール).
11. Cette(テット) arme(アールム) est très(トリス) légère(レジェール).
12. Ma

mère est chère(シエール).

第六章 長母音

(L'accent circonflexe)

九四、

- |             |               |             |             |               |                 |
|-------------|---------------|-------------|-------------|---------------|-----------------|
| âme,<br>アム  | âge,<br>アージュ  | tête,<br>テテ | ténu,<br>テヌ | gîte,<br>ギテ   | maître,<br>マートル |
| hôte,<br>オト | hôte,<br>オートル | pâte,<br>パテ | âme,<br>アム  | rêve,<br>レヴ   | bête,<br>ベテ     |
| île,<br>イル  | épile,<br>エピル | pôle,<br>ポル | côte,<br>コト | voûte,<br>ヴウテ | coûté,<br>コウテ   |
1. Où est son âme? 2. Son âge?—Je ne(ク) sais(テ) pas(ス) son âge. 3. Le hère(ユエール) était(エテ) dans(ダ) la forêt(ラ フォレ)?— Leur hôte est dans la forêt. 4. Où est leur(ル) hôte(オートル)?— As-tu perdu la hôte?(ア ス ム ル オートル タ ヲ リ ム ト).

第七章 一より二十迄の數字

(Les vingt premiers adjectifs numériques)

九五、	1. un (男性) アン	5. cinq シヤク	10. dix シス	15. quinze クインツ	20. vingt ヴァン
	1. une(女性) ユヌ	6. six シス	11. onze オンズ	16. seize セイズ	
	2. deux ドゥ	7. sept セプ	12. douze ドゥズ	17. dix-sept シクゼプ	
	3. trois トリス	8. huit ユイト	13. treize トリス	18. dix-huit シクソイト	
	4. quatre カトル	9. neuf ヌフ	14. quatorze カトルズ	19. dix-neuf シクソヌフ	

此に掲げた數字の十七十八十九は皆連線を以て dix と其次に来る語とを  
運ぬれど明治三十四年三月九日發布の佛國文部省令で之を必要としない  
ことゝなつた。

九六、  
cinq, six, sept, huit, neuf 及び dix の次に来る語の首字が子音か又は有聲の h  
なれば此六つの數字(即ち數形容詞)の語尾を發音してはならない。

Cinq Tunes, six Greens, sept rats, huit chiens, neuf pains, dix francs.  
シヤク ツンズ シク グリンス セプ ラツ トゥイト シヤンズ ヌフ パインズ シク フランクス

九七、  
deux, trois, six 及び dix の次に来る語の首字が母音か又は無聲の h なれば此四  
つの數字の語尾に「ザ」行の發音を與へよ。

deux amis, trois enfants, six arbres, dix ans, dix heures.

第八章 アポストロフ、セズエ、雙點(トレマ)連線

(トレマ、ニオン)。

(L'apostrophe, la cédille, le tréma et le trait d'union.)

九八、

第四十七、四十八、四十九、五十の四節に述べた通り

アポストロフ即ち略字符は、母音か又は無聲のhを首字に持て居る語の前にある語の語尾がa, e 又はiで終つて居る時其a, e 又iの代りに置かるゝ符號じゑる。○) L'apostrophe (La apostrophe の代り), trait d'union (trait de union の代り), l'ami de l'homme(le ami de le homme の代り), l'histoire de l'héroïne (La histoire de la héroïne の代り)

九九、

i の略せらるゝのは、i 及びis の前にsi が來づ、i のi が衝き合ふ場合に限る

Si'il arrive (si il arrive の代り), s'ils arrivent (si ils arrivent の代り)

一〇〇、

セズエ(第四十八節の説明を見よ)

Français, façon, glaçon, Besançon, ga,  
legon, maçon, soupçon, tronçon. etc.

一〇一、

雙點(第四十九節の説明を見よ)

Noël, naïf, hair, aïeul, ambiguë,  
archaïsme, coïncidence, contiguïté  
égoïsme, égoïste, héroïque, Moïse, mosaïque,  
prosaïque, païen, naïveté, ouïe.

一〇二、

連線(第五十節の説明を見よ)

Pays-Bas, arc-en-ciel, chef-d'œuvre,  
croc-en-jambe, hors-d'œuvre, pied-à-terre,  
pot-au-feu, Val-de-Grâce,  
ci-joint, ci-inclus, qu'est-ce-ci? celui-ci,  
cet homme-ci, ci-dessus, ci-dessous, ci-devant,

ci-avant,	ci-après,	ci-contre,	par-là,	celui-là,
cet homme-là,	en ce temps-là,	là-dessus,		
là-dessous,				

### 第九章 i と y と

(Les Voyelles I et Y)

- 一〇三、 y の加はつて居る語の多くは希臘から來た語故之をイ・ン・ンとスル
- 一〇四、 i に短かい發音と長し發音とある。  
短かい發音の i …… di, ni, si, ici, ami.  
長し發音の i …… gîte(と giste), épître(と épistre)
- 一〇五、 第十八節及第二十二三節に述べた様に y には i 二つの働きをすること、唯一つの働きをすること、ノの二通りの働きがある。  
y が兩母音の間に置かれた時には常に i 二つの働きをする假令ば  
essayer(essai-ier), abbaye(abbai-ie), payer(pai-ier), employer(emploi-ier),  
moyen(moi-ien), joyeux(joi-ieux), joyant(ai-iant).
- 一〇六、

一〇七、 y が唯一つの i の働きをする場合は四つある。即ち

- 第一、 y が唯一字丈別立する場合  
il y a, j'y travaille, je n'y livre, voulez-vous y aller?  
第二、 一語又は一綴の初めにある場合他の母音の直ぐ前に  
yeux, Yonne.  
第三、 一語又は一綴の終りにある場合  
Passy, Issy, whiskey, Ivry.  
第四、 兩母音の間にある場合  
acolyte, mystère, syntaxe, style, physique, martyr  
少し横道へ入り過る様なれど i と y とに關係あること故附記して置くが随分 Hippolyte, Hippocrate などノ書く人がないでも無いけれど元來 p 二つの前に來る「イ」は常に i で p 一つの前に來る「イ」は y であると思つて居れば間違なし。即ち  
i… Hippolyte, Hippocrate, Hippias, ……

一〇九

yにi一つの發音を持たしつゝか、i二つの發音を持たしつゝか迷ふことが随分あるから左にi一つの發音即ち「イ」とナリ發音する語の中の主なるもの表を掲げて置く。

y..... hypothèse, hyperbole, hypothèque.....

abyrne, acolyte, amélysste, amphictyons, amygdales, analyse, androgyne, ankylose, anonyme, aphye(poisson), apocalypse, apoeryphe, azyrne, Babylone, borborgme, Cacoehyme, chrysaïde, chrysocolle, ehyle, chypre, clepsydre, clystère, coryphée, corybante, cyclope, cycle, cygne, cylindre, cymaise, cymbale, cynique, cynisme, cyprès, Cyr(saint), cythère, dactyle, dey, dithyrambe, dryade, dynastie, dyssentrie, Elysée, emphytéotique(bail), empyrée, encyclopédie, érysipèle,

étymologie, enthymème, Euphratosyne, Egypte, Gymnase, gymnique, homonymie, hyacinthe, hydraulique, hydre, hydrophobie, hydrophisie, hyène, hymen, hymne, hysope, hygromètre, hyade, hydromel, hydrographie, hypocrite, hystérique, hydrogène, idylle, Lyon(ville), labyrinthe, larynx, lymphie, lycée, lyre, lynx, martyr, martyre, métaphysique, myopie, myriagramme, myriamètre, myrte, mystère, mystérieux, mystificateur, mystique, mythologie, myrthe, Mnémosyne, métempsychose, métonymie, Néophyte, nymphe, Odysée, olympie, olympiade, onyx, oxymel, oxyde, oxygène, Panégyrique, paradigme, paralysie, physionomie, physique, polygamie, polype, polysyllabe, polyglotte, polygone, polyôme,

polytechnique(école), polythéisme, presbytère, prytanée, porphyre,  
 péristyle, pygmée, pylone, pyramide, pyrthonisme, physicien,  
 pythouisse, prototype, psyché(meuuble), pythie, Pyrénées, prosélyte,  
 pseudonyme,  
 rythme,  
 satyre, style, stylet, Styx, Stéréotype, sycamore, sycophante,  
 syllabe, syllepse, syllogisme, sylphe, sylvain, symbole, symétrie,  
 symphonie, symphonie, symptôme, synagogue, synecdoque, syndic,  
 synallagmatique, syncope, synode, synonyme, synoptique, syntaxe,  
 synthèse, sibylle(prophtéresse), système,  
 tym, tympanon, type, tympan, typographie, tyran,  
 zoophyte, zéphyr(vent doux),  
 Y(adverbe et pron.) yeux, yacht, yeuse.  
 此表の外 hypothèse, hypothéque 等第百八節の述之字などがあるは皆 i

一〇の働をするべから此等の語から變化して出來た語に於ても全ビコ  
 とである。

第十章 O U H N J

(Les voyelles O et U)

- 110' 短音の O Pol, bol, col, sol, vol, coq, colle folle.  
 長音の O Dôle chose, dose, pose, rose, morose,  
 fosse, grosse,  
 短音の U Butte, calcul, minute  
 長音の U Buse, muse, flûte.  
 111' 兩母音の間にある O U 音(即ち「オ」行音)を發す假令は前例の  
 chose(chô-ze), dose(dô-ze), rose(rô-ze) buse(bû-ze), muse(mû-ze) etc  
 112' 例、  
 113' 1. Quel petit bol! 2. As-tu de la colle? 3. Notre frère est-à l'école. 4. Cet-homme

- est probe. 5. *Cet os est vide.* (此 os といふ語はオとのみいひてsを發音せぬ人あり又オスと二字共に響かす人あり) 6. *Le mur est élevé.* 7. *Tu as perdu ta âme.* 8. *Cette créature est très dure.* 9. *La buse est stupide.* 10. *La muse était jeune, belle et modeste.*

○第十一章 兩語の間の發音の連續 (第三十章第三十節)

(Les liaisons entre les mots)

一二三

前章の例に言葉と言葉と連續する發音の仕方、即ち前の言葉の終りの字と次の言葉の初めの字とを一一緒に發音するやうに書いた之を語のリエーションといつて、前の言葉が子音で終り、又無聲の。で終つても、後の言葉が母音で、又は無聲のhで始まる場合に起ると、說話或は讀方の際發音を滑らかにして、非常に耳に心地よいものであるが、此處に述べた様な場合には、必ず常によりエーションを行つて善いかといふに、必ず左様とも限らない、言ひ換へれば此リエーションに對し

ては精確な規則が無いのである、唯一つの規則といふは、チト漠然として居るが、意味と趣味と耳觸りとを考へて、此三つに支障おこなくば及ぶ丈リエーションをやる方がよいといふことである、即ち第一の語が無聲の。か又は。か、又は。か、又は。か、かゝつて終つた時次の様に音を連ねる。

- table ouverte (ターブルーヴールト), Als-aimé (アルアイムエーメー), vis-en bois (ヴィザンボワ),  
 deux et deux font quatre (ドゥーエードゥーフォーカール), lisez-un bon livre (リズーザンボンヴーヴ),  
 deux-jeun-honnête (ドゥーゼーヌオンヌ), bon enfant (ボンenfant), avant-hier (アヴァンテヒエール),  
 droit-acquis (ドワイタクウヰ).

又左に掲ぐる言葉は、之を連ねれば、語調圓滑を缺くに至る故、謹して其リエーションを避けねばならぬ。

- plomb argentifère (プルム アルクワシヴラフエール), orang-outang (オランウータン)  
 (然しこれをオランウータンと發音する人もある), drap avarié (ドラプ アヴァリエール),  
 champ inondé (シャン イノンデ), nid artistement fait (ニドアルファストフアン  
 プエール), contrat à vie (コントラ ヲフェール), aller aux eaux (アルローオーター).



parfum exquis(アブルフアノヒキスキ), nation en décadence(ナンオンフアノチカダンス),  
 de loin en loin(ダロフアノアノロフ), donnez m'en un peu(フンキーマッアノアノ),  
 que vent-on aujourd'hui(クヴァートンカークアールダ), les onze premiers nombres(レ  
 オンスアブルミエノアブル), prononcer le grand oui(アロンスールグアノウイ),  
 cent an(サン アノ) etc.

一四 前節の例より左の一箇の文章に出た(セリヤームの符)

La Laitière et le Pot-au Lait.

Une laitière s'en allait à la ville avec son pot-au lait sur la tête. Elle marchait à grands pas,  
 et comptait déjà dans sa pensée l'argent qu'elle ferait de son lait. Comment l'emploierai-je  
 pour le mieux ? disait-elle. J'aurais certainement bien une pièce de trente sous de mon lait.  
 J'en achèterai d'abord des œufs ; ces œufs me feront des poulets, que j'éleverai. La petite  
 cour de notre maison est tout-à-fait commode pour cela ; mes poulets-y seront en sûreté.  
 En vendant mes poulets, j'aurai de quoi avoir une truie, qui me fera des petit cochons. Les  
 cochons ne coûtent presque rien à engraisser, et j'en vendrai bien le lard. Après cela, pourquoi

n'achèterais-je pas une vache ? J'aurais assez d'argent pour cela. La vache me fera un  
 veau. Quel plaisir de voir sauter le veau dans la prairie ! Là-dessus la laitière s'écroula aussi  
 de joie : le pot-au lait tomba ; et toute sa fortune fut répandue avec le lait.

○第十二章 再び a, e, i, u に就て

(Sur les voyelles A, E, I et U)

一五 第一 a は殆んど其固有の音を(長し短かしはあれど)失なふことのない母音な  
 れど次に擧る各語に於ては全く其音を失なふ。

然し août 及び aoûté は août と同根の語なれど「アウター」「アウター」と發音す。  
 第二 e は hennir, hennissement, indemnité, rouennerie, solennel 及び此語と結合し  
 て出來た語及び prudemment, eloquemment など様々 emment へ終る凡ての副  
 詞の語尾に於ては e と同様に發音す。但し indemne は indemnité と同様の字なれ  
 どアンテムと發音せねばならぬ。

第三 i 次の語に於ては i は全く發音せず。

donnrière, donnrier (但し donaire は ゴーネール),  
ドーンリエー ドーンリエ  
 encoignure, oignon, Montaigne, Champaigne(philippe de), Cavaignac, moignon,  
エンクワヌール オニオン モンタニエ シャンパニエ カヴァニャク モニオン  
 poignet, poignant(此語をポアニオンと發音する人もある), poignard.  
ポニエ ポニヤン ポニヤル

【第四】次の語に於ては、ロゼを無聲のルとす。

aigüière, Guyane, Guyenne, guise  
エイグイエー グイアネ グイェンヌ グイゼ

又 a guia, questure, équestre, équiangle, équitation, équilateral, quinquagénaire,  
 quinquagésime, quintuple, quintette, quibus, quinquennal, quinquere, quinquième,  
 quintil, quitus, quiéisme, Quintilien, Quinte-Curce. etc など、の語に於ては、ロゼを無  
 聲の發音して、ズントニムを形成する(第二十四章の百五十三節以下参照)  
 又 Guadeloupe, Guadiana, Guarini, alguazil, Guatémala, Guadaluquivir, lingual など、に  
 於ては「ム」と明瞭の發音ナ(カ、ハ、タ、ス)

第十三章 數字(數形容詞)の續(カ)

(Suite des adjectifs numéraux)

11カ	21. vingt et un. <small>ヴァン</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>	35. trente-cinq.	49. quarante-neuf.
	22. vingt-deux. <small>ヴァン</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>	36. trente-six.	50. cinquante. <small>クワ</small> <small>カン</small> <small>テ</small>
	23. vingt-trois. <small>ヴァン</small> <small>ト</small> <small>ロワ</small>	37. trente-sept.	51. cinquante et un. <small>クワ</small> <small>カン</small> <small>テ</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>
	24. vingt-quatre. <small>ヴァン</small> <small>カ</small> <small>ト</small> <small>ト</small>	38. trente-huit.	52. cinquante-deux. <small>クワ</small> <small>カン</small> <small>テ</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>
	25. vingt-cinq. <small>ヴァン</small> <small>サン</small>	39. trente-neuf.	60. soixante. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small>
	26. vingt-six. <small>ヴァン</small> <small>シ</small> <small>ク</small>	40. quarante. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small>	61. soixante et un. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>
	27. vingt-sept. <small>ヴァン</small> <small>セ</small> <small>プ</small>	41. quarante et un. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>	62. soixante-deux. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>
	28. vingt-huit. <small>ヴァン</small> <small>オ</small> <small>イト</small>	42. quarante-deux. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>	70. soixante-dix. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>ク</small> <small>ス</small>
	29. vingt-neuf. <small>ヴァン</small> <small>ヌ</small> <small>フ</small>	43. quarante-trois. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ト</small> <small>ロワ</small>	71. soixante et onze. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>エ</small> <small>オン</small> <small>ズ</small>
	30. trente. <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small>	44. quarante-quatre. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ク</small> <small>ア</small> <small>ト</small>	72. soixante-douze. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>
	31. trente et un. <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>	45. quarante-cinq. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>サン</small>	73. soixante-treize. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>ト</small> <small>ロワ</small> <small>ズ</small>
	32. trente-deux. <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ド</small> <small>ズ</small>	46. quarante-six. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>シ</small> <small>ク</small>	79. soixante-dix-neuf. <small>ソク</small> <small>サ</small> <small>ン</small> <small>テ</small> <small>ク</small> <small>ス</small> <small>ヌ</small> <small>フ</small>
	33. trente-trois. <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ト</small> <small>ロワ</small>	47. quarante-sept. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>セ</small> <small>プ</small>	80. quatre-vingts. <small>カ</small> <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ス</small>
	4. tiende-quatre. <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>カ</small> <small>ト</small> <small>ト</small>	48. quarante-huit. <small>カ</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>オ</small> <small>イト</small>	81. quatre-vingt-un. <small>カ</small> <small>ト</small> <small>ラン</small> <small>テ</small> <small>ス</small> <small>エ</small> <small>トゥン</small>

82. quatre-vingt-deux.	97. quatre-vingt-dix-sept.	200. deux cent.
89. quatre-vingt-neuf.	99. quatre-vingt-dix-neuf.	250. deux cent cinquante.
90. quatre-vingt-dix.	100. cent.	1000. mille.
91. quatre-vingt-onze.	101. cent un.	1,000,000. million.
92. quatre-vingt-douze.	102. cent deux.	

此に掲げた数字の二十二以下大多數は皆連続して連ねれど昨年發布の文部省令で其必要のなりこととなつたことは第七章第九十五節に述べ通りである。

### ○第十四章 結合母音の中鼻音

(Voyelles nasales)

一七  
一の母音が *h* 又は *m* と結合して一音を形成する時之を名けて鼻母音といふ。第二十二、二十三、二十四節を参照せよ。

am	(Adam(アダム), ambre(アンブール))
an	{ pan(パン), van(ヴァン), ange(アンジュ), fange(ファンジュ) ancre(アンクル)
en	{ cancan(カンカン) en(アン), entre(アンター), encre(アンクル), fente(ファンテ), vente(ヴェンテ).

in, ain, ain, ein 皆 in(アン)の音  
fin(ファン), fain(ファン), pain(パン), vain(ヴァン), sein(ゼン).

on(オン)……bon(ボン), don(ドン), mon(モン), ton(トン), son(ソン).

un, eun un 皆 un(アン)の音  
chaun(シャカン), alun(アラン), à jeun(アジュン), parfum(パルファン).

am	{ ample(アンブル), ampoule(アンポール),
em	{ emploi(アンポワワ), empir(アンプリール), empêcher(アンペーシェー),
im	{ 及 <i>b</i> の前に imber(アンベール), importer(アンポルター) importun(アンポルタン),
om	{ ombre(オンブル), prompt(プロンプ), compte(コント)

附記 右 an, in, un の凡てに唯「アン」といふ發音のみ與へた。シカシ實際口で發音する場合には皆少し宛相違があるのである。是は立派に口を開いて

發音し、*o*は口を余計に開かず呼氣を突き出す様にして發音し、*u*其間を取て發音するといふ様に決して一樣ではない。従つて出て来る音にもそれぞれ違ひのあることは事實なれども其相違を書き現はすことはどうしても出来なから故に止を得ず唯「*am*」と斗り最も近い音を取て書て置いた。此後も同じ場合には同じ方法を取るより外仕方がない。

一八、 album, rhum, factum の中の *um* は「*ku*」と發音す。即ち「*albu*」「*rohu*」「*factu*」ト云フ。

一九、 又 *u* 或は *m* の前に母音があつても共に結合して鼻音を爲さぬ場合がある。即ち  
一 *m* 或は *u* の後に他の母音のある時

émouvoir(é-mou-voir), panier(pa-nié), mener(me-né),

finir(fi-nir), monarche(mo-nar-k'), unir(u-nir).

二 *u* が二つ重ねられた時

ennemi(é-ne-mi), tonner(to-né), etc.

二〇、 *si* カシ *emmaner(an-me-né)*, *emmancher(an-man-ché)* の二語に於ては鼻音を形成る。此二

語はもと en mener, en mancher と離して書いたものである。

### ○第十五章 結合母音

(Voyelles composées)

三三、 結合母音とは二個又時としては三個の母音が結合して一音を造る時に名ける名である。(第二十二、二十一、二十四節参照)

au 及 eau { élan(エトー), gluant(グリュエター), eau(オー), peau(ポー),  
(*o*の音) seau(ソー), veau(ヴァー), bateau(バトー), coudeau(クドー).

ai { è(エー)の音を { faible(フエーブル), maigre(マージュル), peine(ペーヌ), Seine(スエーヌ).  
ei { 持つこととし

ai { é(エ)の音 { j'ai(ゼ)(動詞 avoir を見よ)  
を持つ時

ai { e(エ)の音 { faisant(フザン), bienfaisant(ビヤンフザン), malfaisant(マルフザン),  
を持つ時 bienfaisance(ビヤンフザンス), faisais(フズエー), 等

eu(フエー), fou(フー), sou(スー).

11111' (短) (長)  
 ai.....faites(フエト),.....fate(フエート)  
 eu.....jeune(ジュヌ),.....jeûne(ジュヌーヌ),  
 ou.....doute(ドウト),.....voûta(ヴータ).  
 }の二(「ア」と發音) }fron(フロン), paon(パオン), laon(ラオン).  
 }1.(「ア」する語.) }  
 }2.(「オ」と發音) }laon(ラオン), }  
 }發音 } }クンと發音する人もある。août(オウ).

### ○第二十六章 ン、ム、ヌ

(Diphthongues)

11111'

第二十五節を見よ。

ia(イア).....diacre(ディアクラ), faacre(ファアクラ), piano(ピャナ).  
 ia(イエ).....biais(ビャエ), bréviaire(ブレブヴァエ).  
 }aie(シャエ), fel(フャエ), miel(ミャエ), amitié(アミテ) }  
 }ier(シャエ), pied(ピャエ), bière(ビャエ), litière(リチャエ). }

11111'

第二十五節を見よ。

ieu(イェ).....Dieu(ヂェ), lieu(リュ), milieu(ミリュ), pieu(ピェ).  
 épieu(ピャエ)  
 io(イオ).....dio(クヨオ), brioche(ブリョシュ), pioche(ピョーシュ).

### ○第二十七章 ン、ム、ヌの綴り

(Suite)

oe(オエ).....noelle(ヌェル), foerre(フャエ), poêle(ポャエ).  
 oi(オイ).....foi(フャイ), loi(ロイ), moi(モイ), toi(トイ), doigt(ドイ).  
 oua(ウア).....douane(ドヴァヌ), pouaere(プヴァエ).  
 oue, oué, ouet .....rouelle(ルェル), roué(ルヴェ), fouet(フヴェ),  
 }alouette(アルヴェ), }  
 oui(ウイ).....oui(ウイ), Louis(ルイ), fouine(フイヌ).  
 ua(ウア).....équateur(エクタール).  
 uel(ウェル).....cruel(クリュエ), écuelle(エキュエ), ruelle(リュエ).

第一編

41

truelle (ト ヲ ヌ ヌ ヌ).  
lui (ユ = ヲ), buis (ウ = ヲ), nuit (= ヌ ヲ), puits (ウ = ヲ),  
puis (ウ = ヲ), conduire (= ヲ ヌ = ヲ ヌ).

の二 { 1. (無聲の e に 相當する音) } œuf(ウ - ヲ), boeuf(ウ - ヲ), cœur(ヌ - ヌ), œuvre(ウ - ヲ ヌ).  
œ { œil(ウ ヲ ヌ), œillade(ウ ヲ ヌ - ヲ), œillet(ウ ヲ ヌ).  
變音 } { 2. (é に 相當する音) } Œdipe(ウ ヲ ヲ), œsophage(ウ ヲ ヲ - ヲ).

○ 第二十八章 鼻 音 の 變

(Nasales.)

iam, iad. (イ ヲ ヲ)..... iambe(イ ヲ ヲ ヲ), viande(ヰ ヲ ヲ), diantre(ヲ ヲ ヲ ト ヌ).  
ieu(イ ヲ ヲ)..... bien(ウ ヲ ヲ), lieu(ユ ヲ ヲ), le mieu(ル ミ ヲ ヲ), viens(ヰ ヲ ヲ),  
lieu(ヲ ヲ ヲ).  
ion(イ ヲ ヲ)..... lion(ユ ヲ ヲ), scorpion(ヌ ヲ ヌ ヲ ヲ), nous avions(ヌ - ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ)  
ouan, ouen..... Rouen(ル - ヲ ヲ), Louange(ル - ヲ ヲ ヲ).  
Rouennais(ル - ヲ ヲ ヲ ヲ), Ecoen(ウ - ヲ ヲ)

oin(オ ヲ ヲ)..... coin(コ ヲ ヲ), foin(フ ヲ ヲ ヲ), loin(ル ヲ ヲ), soin(ソ ヲ ヲ).  
moins(モ ヲ ヲ), poing(フ ヲ ヲ ヲ), besoin(ベ ヲ ヲ ヲ ヲ), coing(コ ヲ ヲ).  
témoin(テ ヲ ヲ ヲ), point(フ ヲ ヲ), moins(モ ヲ ヲ ヲ).  
uin(ウ ヲ ヲ)..... juin(ジュ ヲ ヲ), pinguin 又 pinguin(ピ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ).  
ouin(ウ - ヲ ヲ)..... Bedouin(ベ ヲ ヲ - ヲ ヲ), babouin(バ ヲ ヲ - ヲ ヲ), barragouin(バ ヲ ヲ ヲ - ヲ ヲ).  
rouin(ウ - ヲ ヲ), sagouin(サ ヲ ヲ - ヲ ヲ), marouin(マ ヲ ヲ ヌ ヲ - ヲ ヲ).

○ 第二十九章 練習文

(Exercise)

- 1114  
1. Son oncle a passé un an à Amboise.      2. Cette ville est en Touraine(ト ヲ ヲ) ヰ ヌ ヌ ヌ ヌ  
      ツ ヲ ヌ ヌ ヌ ヌ.      3. Ce colier(コ ヲ ヌ) était en ambre.      4. Quand(カ ヲ) j'avais faim,  
je demandais un petit pain.      5. Cette fleur a un excellent parfum.      6. J'étais à  
l'ombre.      7. Le salon était très sombre.      8. Je l'empêcherai de remplir son grand  
(グ ラ ヲ ヲ) verre.      9. J'ai un veau, un beau veau blanc(フ ラ ヲ ヲ) dans mon bateau.  
10. Cet animal(セ ヲ = ヲ - ヌ) n'est pas malséant,(マ ル ヲ ヲ ヲ ヲ) 11. Je faisais  
(フ ヲ ヌ ヌ - ヌ) maigre(マ - グ ル) le vendredi.      12. J'ai laissé tomber un sou sous la table.

13. Le feu était éteint (エテラタラフ). 14. Votre jeune ami (ジュニアミ) me dit (ジ) que vous faites (フエーレ) maigre le vendredi. 15. Sa tarte jeûne (ジュエーヌ) le vendredi-saint. 16. Je doute que notre oncle arrive en août. 17. Je taon tourmente le taureau. 18. Aimes-tu la moelle?—J'aime la moelle de boeuf. 19. Désires-tu un oeuf?—Oui, je désire un oeuf, un bon oeuf. 20. Prête-moi un louis, deux louis, trois louis. 21. Son frère est employé à la douane. 22. J'ai tué nue mouette sur le bord de la mer. —Moi, j'ai tué nue alouette dans le champ. 23. Il a jeté la fouine dans le puits. 24. Puis—je revenir par la ruelle? 25. Aimes-tu la viande blanche? 26. J'ai reçu ton journal et le mien. 27. Tu mérites cette louange. 28. La maison du coin n'a-t-elle pas besoin de reparations? (此 n'a-t-elle pas の t は口調を善くする爲めに唯挿入した字で意味には少しも關係なし). 29. Le Bédouin n'a-t-il pas tué un lion? 30. As-tu jamais mangé un oeuf de pingouin?

○第二十章 っ、じ、及ひのつ音

(C et S—D se prononçant T).

一二九

母音 e, i, y の前にある o は常に e と同じ様に發音す。

- ce (ケ)    cerf (セル)    oi (ウ)    merci (メルシ)    Orégy (クレジー)  
se (セ)    serif (セルフ)    si (シ)    réussi (レジュシ)    Passy (パッシー)

一三〇

second (セコン) 及び reine-claude (prunes de) (レーヌ クロープ) の二語に於て は s の音を發す。(第八十二節參照)

一三一

語の終りに於て發音する o と發音しない o とを分けることは甚だ六ヶ敷い。(第四章八十九節及九十一節參照)

- frac (フラック),    bloc (ブロック),    tillac (チラク)  
estomac (エスタマク),    acroce (アックロセ),    Caoutchouc (カウチュー),  
porc (ポル),    clerc (クレル),    blanc (ブラン)

などの様に o の無音の語も少なくなく、但し porc, clerc, blanc の三語は他の語と結合して porc-épic, de clerc à maître, du blanc au noir といふ別の語法 (locution) を形成した場合には o の發音を出

す。

一三二 一般に「s」は語の中において、兩母音に挟まれて居る「s」は「z」の響き「s」行音)を出すのである(第百十一節参照)。けれども「s」を以て始まる語が、語根となつて、他の語と結合した場合には「s」は本來の「s」音(「s」行音)を發す。即ち

présupposer( pré-supposer ), <small>プレ・スプ・ゾセー</small>	vraisemblable( vrai — ) <small>ヴライ・ゼムブラブル</small>
antisocial( anti — ), <small>アンティ・ソシヤル</small>	monosyllabe, <small>モノシラバブル</small>
désuétude, <small>デュエテュード</small>	préséance, <small>プレゼアンス</small>
resoluer, <small>レゾリュエール</small>	cosécante, <small>コセカント</small>
	parasol. <small>パラソル</small>
	etc

一三三 dで終る語の次に母音か又は無聲の「d」で始まる語來る時は、其「d」は「t」の響きとなる。即ち

grand-ami( グラソタミ ),	grand-univers( グラソタニヴェル ),
grand-éclat( グラソタクラ ),	grand-ypéau( グラソタプレオー ),
grand-individu( グラソタタンディヴ ),	grand-homme( グラソタム ),
grand-orme( グラソタトルム ),	grand-historien( グラソタストリアン ).

### ○第二十一章 結合子音

(Consonnes composées : Ch, Ph, W)

一三四 ch の普通音は「シヤ」行の軟音じめる。即ち

chat, <small>シャ</small>	chien, <small>シャン</small>	chou, <small>シュ</small>	chaise, <small>シャゼ</small>
chambre, <small>シャムブル</small>	chameau, <small>シャモ</small>	chimie, <small>シミ</small>	Michel, <small>ミケル</small>
cloche, <small>クロシェ</small>	mouche, <small>ムウシェ</small>	toucher, <small>トゥシェ</small>	

一三五 然るに「h」行の「ch」や希臘から來た語の中には「c」行音(「c」行音)を持つものが少なくない。便利の爲其主なるものを舉げれば次の通りである。

achromatique,	anachorète,	anachronisme,
antechrist,	antichrétien,	arachnoïde,
archaïsme,	archange,	archéologie,
archétype,	archiepiscopat,	archonte,
aurochs,	autochthone,	bacchanales,



bacchante,	brachial,	catachrèse
catéchumène,	chalcographe,	chaldéen,
cham,	chananéen,	chaos,
Charybde,	Chersonèse,	chéiroptère,
chiragre,	chirographaire,	chironanchie,
chlamyde,	chlorate,	chlore,
chœur,	choléra,	chorégraphie,
choriambe,	choriste,	chorus,
chrême,	chrétien,	chromate,
chrome,	chronique,	chroniqueur,
chronogramme,	chronologie,	chronomètre,
chrysalide,	chrysanthème,	chryscale,
cochléaria,	conchoïde,	conchyliologie,
dichotomie,	drachme,	ecclymose,

écho,	épichérème,	eucharistie,
exarchat,	fuchsia,	ichneumon,
ichthyologie,	isochrone,	lichen,
liéthochrome,	loch,	malachite,
mnémotechnie,	monochrome,	orchestre,
orchidées,	philotechnie,	polytechnique,
psychologie,	pyrotechnie,	saccharifère,
strychnine,	synchronisme,	technique,
trochanter,	trochée,	yacht,

一三六  
 及此等の語の結合したるもの。  
 右の表中に組み込まざるべきものノ様に見えて却て「シ」行の軟音を持つ語を擧  
 げれば  
 Achéron(Théâtre-Français と Académie との發音の仕方はアセロンである。他に  
 アクロンと發音する人もある)

archevêque,	archidiacre	archimandrite,
archipel,	archiprêtre,	architectonique,
manichéen,	pachyderme,	tachygraphe,
trachéotomie,		

及此等の語の結合したるもの。  
 又 Michiavel 及び キンマン、Michel-ange 及び クランタ、と發音するに拘はらち  
 machiavelisme, machiavelique 及び ミンヌリスタ、及び ミンヌロリ、と發音す。 Michel 及び  
 「ミヤネ」と發音す。

一三八' plizé の様に發音す。即ち

pharmacie,	physique,	phrase,	plaque,
photographe,	amphibie,	sphère,	téléphone,

W 即ち double V (バーナンヌ) とは二様の發音がある。  
 第一 獨逸語から來た語の中にある時は唯 V の様に發音すればよい。  
 Wagram, Weimar.

第二 英語から來た語の中にある時は通例「ウ」と發音す。

但し wagon とする字は英語の wagon から來たのなれど「マロン」と發音す。

第二十二章 子音 (La consonne G)

一三九' g は e, i, y の前は「ガ」と發音する。  
 gelée, gibier, gymnase.  
 一四〇' g は a, o, u の前は「ガ」行音を發す。  
 gant, garnin, gond, gué, gui, droguiste,  
 envergure, Gustave.  
 一四一' g は母音 a, o 若しくは u の間に e 挿入する時は「マ」行音を發す。  
 gear, géole, genre.  
 一四二' élang, seing, fanbourg の語尾に a, n, r は發音す。 jong の語尾の g は極く軽く發音す。

一四三' gangrène の音字に bourg(faubourg) と綴(つ)の語尾との s は y 音を持つ。  
 それから次の語とリカーンをする場合には

sang illustre, rang honorable, long intervalle,  
サン イリュストレ ラン ヨラナブル ロング インターヴァル  
 suer sang et eau.  
スエー サン ケー オー

と s の y 音を持つ。

一四四' 又 signet, Regnard, Regnant. の中では s は全く無音で此等の語は「シチ」「ルナド」  
 「レノール」の綴りである。

### ○第二十三章 結合子音 語

(La consonne composée (Gn,))

一四五' gn は普通「リ」行音を持つ。

magnan <small>マニヤン</small>	magnétiser <small>マニエティゼー</small>	rogner <small>ロニエ</small>
magnanime <small>マニヤニム</small>	magnifique <small>マニヤク</small>	rogature <small>ロニエール</small>
Lagny, <small>ラニ</small>	Boulogne <small>ブルグニ</small>	campagne <small>カンパニ</small>

一四六' 次に掲ぐるところの語中の gn は結合せず、發音も矢張「シチ」「シネ」「シニ」「シム」と  
 S の様に各々獨立す。

Ligny, <small>リニ</small>	vergogne <small>ヴェルグニ</small>	Champagne <small>シャンパニ</small>
ligne <small>リニ</small>	cigogne <small>シグニ</small>	Allemagne, <small>アルマニ</small>
vigne <small>ヴィニ</small>	ivrogne <small>イヴロニ</small>	Bretagne <small>ブレタニ</small>
cygne <small>シニ</small>	Bourgogne <small>ブルグニ</small>	magnésie. <small>マニエシ</small>
signe <small>シニ</small>	Gascogne <small>ガスコニ</small>	
ag-nut, ag-nation, ag-natique, ag-nus, cog-nat, cog-nation, desig-natif	diag-nostique, ig-né ig-nicole, ig-nition, inexpug-nable, mag-nificat. pathog-nomonique,	prog-né prog-nostic, prog-nostique, recog-nitif reg-nicole stag-nant stag-nation.

一四七、

diag-nostic                    pig-noratif.  
 言葉の始めにgnを持つ居る語即ちgnide, gnomon, gnomide, gnomique, gnominique, gnostique なども皆「シ」<sup>ニ</sup>と發音すれども其他は殆んど凡て「ニ」行音を持つ、即ち

a-gneau,	ca-guard,	i-gna-ne,	i-gna-re,
i-gno-rant,	im-pré-gner,	in-co-gni-to,	li-gne,
ma-gnat,	pi-gnon,	si-gnal,	si-gnel.
Re-guard,	Re-gnard,	i-gno-mi-nie.	

など皆「ニ」行音である。

【附註】此處に掲げた語の中、イタリックに書てある語に就ては少しく註せねばならぬことがある。

一四八、

inspégnér (及 impregnation) は之をアンプレシネー(及アンプレクナシオン)と發音する方がよいといふ説もあるが、矢張「ニ」行音の方が正當である。

一四九、

又incognitoを「インコグニト」と發音する人がある。シカシ此字は羅句語から來た字でなく純粹な伊太利語故、「ニ」行發音の方が正しい。嘗ては伊太利語では常に

一五〇、

「ニ」行音を持つのである。  
 又 signet, Regnard, Regnard の三字に就ては、第二十二章第四百四節に述べた通り、「シネ」「ルナル」「ルノ」と讀んで、gを無音と見る説もあるが、或文法家は之を非難して、signetはsigneといふ語から來たのであるのに、之を「シニ」と讀まないで「シネ」と讀まねばならぬといふは何の爲であるか、少しの理由も見出されない。つまり、無知の結果に過ぎないのであるから、斯る説には従はないで、矢張「シニ」と讀だ方がよい。余り讀み方を不規則にするのは國語を不明にする原である。といつて大に怒つて居る。其から同じ文法家が Regnard, Regnard を矢張「ルニナル」「ルニロー」と讀め、「ルナル」「ルノ」とは讀むなと戒めて居るから此處に擧げた。

○第二十四章 子音 k  
 (La consonne K)

一五一、

佛蘭西語にkの用ゐらるゝことは甚だ少ない、其尤も普通に用ゐらるゝ語は

Kabyte, képi, kermesse, kilô(キログラムの略),  
カビユテ ケピ ケルメッセ キロ

kilomètre kiosque.

此外普通の字彙のkの部に收めらるゝ文字を總計しても五十字斗りしか無し。gはkの音を發するものが普通である。假令は

一五二' Québec, quai, quand, quart, que, quel,

qui, quoi, esquif, quinine, quinquina.

一五三' 然るに此外「シ」の變をも出た語と「キ」の變をも出た語との二通りがある。「シ」の變をも出た語は

équateur(エカタールにあらず), équation(エカソオンにあらず)

quadrupède(カプリューブにあらず。以下概之) quadrumane,

aquatique, quadruple, aquarelle, aquatile.

quadragénaire, quadragésime, quaker, quadrature, in-quarto.

(第十二章第四參照)

一五四' 「キ」の變をも出た語は(第十一、十二章第四參照)

quingénénaire(quinの次のquaはkと發音す). quintuple équestre,

quingénénaire(quinの次のquaはkと發音す). quintuple équestre,

équilateral, quinquennium, questure, ubiquiste, équitation,

à quin, Quinte-Curce, Quintilien, quinquagésime, quibus,

quiet, quiétisme, quinquennal, quintidi, quintetto,

quintus.

一五五' 前二節の例によつて推せばaの前は「シ」の音を發しi及びoの前に立つquは「キ」の音を發す。

### ○第二十五章 iとiと。

(La voyelle I et la consonne L)

一五六' miniature とする語は「ミニマール」と發音すべし。ミニマールと發音すべからず。

一五七' 其他iに就ては第百一節、第九十四節、第九章、第十二章等を参照すべし。次に擧る語の中のiは發音せず。

baril, gentil, persil, coucil, gentil, persil,

一五八、	chenil, fournil, grill, sourcil, courtil, fusil, outil, fils.	い の二の重なつた時とーの時の綴り發音は「 <small>シカシ</small> 」次に掲ぐる語に於ては「 <small>シカシ</small> 」の共發音す。
一五九、	bellé, folle, môle, embellir, amollir. 'apollon, belligueux, illettré, inintelligent, alligator, colloque, illisible, intelligible, allegorie, constellation, illuminer, inintelligible, allegorique, gallican, intellectuel, métallique, allusion, illégitime, intelligent, Pallas, 等	

一六〇、  
 与、ille などが「イ」の音を出すと「エ」の音が「エ」の音を出すと其「イ」の音が「イ」(l mouillée) 又「イ」(liquide) と「イ」

○第二十六節 一の濕音(マールイ)

(L mouillée)

【附註】ll が「ニ」行音を出す時と之を「イ」行音又は「リ」キムと「イ」を即ち乾燥しなす圍くなく濕つた音と「イ」を意する。

一六一、  
 l が「イ」, ai, eui, nei, omi の後にある時は大低濕音(「イ」行音)を出す。假令は il..... péril(ペリル), périlleux(ペリル), ille..... Alle(ラ), gentile(ジャンテ), ail..... bail(バイル), travail(トラヴァイル), alle..... caille(カイル), maille(マール), paille(パール), ceil..... ceuil(セイル), eui, neil,..... denil(デニル), seuil(セイル), fauteuil(フォテイル), ceruveil(セルヴェイル), ouil..... fenouil(フェヌール), ouille..... citrouille(シトルール), grenouille(グレンヌール), quenouille(クヌール)。

一六二、  
 然るに次に擧ぐる語は ll 或は ll の綴りを持つても濕音を出さず通常の「イ」音

さ出六

Achille,

distiller(及其結合例詞),

Gille,

idyle,

Lille,

pupille,

subtil,

tranquille,

instiller,

osciller,

sybille,

ville

mille,

Milly,

facile,

utile,

agile,

avril と scintiller, scintillation との中の

1は濕音に呼ぶ人もわり又通常の音に呼

ぶ人もある。

一六三

avril と scintiller, scintillation との中の

1は濕音に呼ぶ人もわり又通常の音に呼

ぶ人もある。

### 第二十七章 有聲の h 及無聲の h

(H aspirée et H muette.)

一六四

hには有聲と無聲との別がある(第三十三三三三十四三十五節参照)

一六五

有聲の h (h aspirée) は其前に来る冠詞の語尾を落さしめるといふことも、又其前の語の語尾の子音と其 h の後の母音とを連続して發音せるといふともなり。

一六六

假令ば le héros, les héros, la hache, les haches の h の様なものをいふのである。無聲の h は語の始めにありと中にあることを問はず發音には少しも關係なく、又其前の冠詞 (le, la) の e 及び a を落して略字符に代へ其 h の前の子音と後の母音とを連続して發音せず假令ば homme, hirondelle, adhérent, l'homme, l'hirondelle, les hommes, les hirondelles の中の h の様なものをいふのである。

一六七

héros の h は有聲なれども此を根として出來た他の語の h は凡て無聲である。

一六八

例  
l'héroïsme, l'héroïne, les actions héroïques

H aspirée(有聲)

H muette(無聲)

1. Le hamac est solide. L'habit est trop long.
2. Le harangue est ennuyeuse. L'heure est longue.
3. Le hibou est triste. L'hiver est rigoureux.
4. Le hangar est vaste. Cet honneur est grand.
5. La hotte est pleine. L'horloge est détraquée.

- 6. Ce Hollandais est riche. C'est horloger est exact.
- 7. Le Hottentot est grand. L'hôte est content.
- 8. La halle était pleine. L'hôtellerie était pleine.
- 9. Ce hamard est frais. Cette hufre est fraîche.
- 10. Le hussard est à cheval. Je déteste l'hypocrite.

一六九  
 〔附註〕(一)Hが語の中部の兩母音の間にある時は普通有聲になる。comme, ahent, ahanの様に。

一七〇  
 (二)國及都府の名にあるHは殆んど全く有聲である。la Hongrie, la Hollande, Hambourgなどの様に。  
 ミカシ toile d'Hollande, fromage d'Hollande, eau de la reine d'Hongrie と綴らるる時はHを有聲でなくするといふ説があるけれども、ハニエ氏曰くこれは下等社會の會話に限つた話して決して上流に於て用ゆるべきことには無すと。ト見れば toile d'Hollande など、ニとシとナとシとトと矢張正しく toile du Hollande, fromage du Hollande, eau de la reine de la Hongrie とするなければならぬと見える。

○第二十八章 Tie及びtion  
 (Tie et Tion)

一七一  
 Tieの後は母音來る時は或は「シ」の聲を出し或は「ミ」の聲を出すが、其場合をわかれず。

<p>Ti の(シ)音を出す場合。</p> <p>1° Ti の前に s 或は x の來た場合。        假令ば        bastion, immixtion        combustion, mixtion        digestion, ———        indigestion, bestial        question,        suggestion. etc.</p> <p>2° Tié 又は tier で終る語。</p>	<p>Ti の(シ)音を出す場合</p> <p>1° Patient と之を根として出來た語、及び tial, tiel, tion で終る語と之を根として出來た語。 假令ば。        partial, perfection,        essentiel. racion.        rationnel</p> <p>(但し stion で終る語は「シ」音の(部の第一に入るものと知るべし。)</p> <p>2° Tien で終る固有名詞及或國の住人と</p>
---	--



<p>假令ば.</p> <p>amié entier,</p> <p>moitié chantier,</p> <p>pitié layetier. 等</p> <p>3° 言葉が tie で終る場合。假令ば.</p> <p>partie, amnistie,</p> <p>dynastie, garantie,</p> <p>hostie, modestie,</p> <p>repartie, sacristie 等</p> <p>(除外例は「ッ」音の部を見よ)</p> <p>4° 言葉が tien 或は tienne で終る場合。假令ば.</p> <p>soutien, tienne,</p> <p>maintien, abstienne. 等</p>	<p>いふことを表はす場合。假令ば.</p> <p>Gratien vénitien</p> <p>Dioclétien. vénitienne.</p> <p>3° Tie で終る語の中の一部、及 a tie で終る語。假令ば.</p> <p>ineptie primatie,</p> <p>inertie démocratie.</p> <p>minute prophétie</p> <p>4° Satiété, insatiable の二語及び initer と balbutier との二例詞。</p>
--	---

(尚ほ「ッ」音の部を見よ)

5° Châtier と其例詞の各變形及び種々の例詞の tions で終る時。假令ば.

- nous portions,
- nous mettions,
- nous intentions, 等

**附註** 「ハ」音の部には、ある種々例詞の tions で終る時は indicatif imparfait や

subjonctif présent ou futur の第一人稱の複数で、此「シオン」といふ發音の仕方は餘り滑かでない故之が名詞となつた場合には大抵皆「シオン」に變化して居る。それ故同じ綴りて讀み方を違はさねばならない様な始末になる。假令ば、

- nous portions des portions
- nous intentions avec des intentions

尚ほ同様の例を舉げれば

- Des exceptions..... nous exceptions (excepter).  
エグセプシヨウズ
- Des inspections..... nous inspections (inspecter).  
インスペクシヨウズ
- Des notions..... nous notions (noter).  
ノーションズ
- Des portions..... nous portions (porter).  
ポーションズ
- Des inventions..... nous inventions (inventer).  
インヴェンシヨウズ

### ○第二十九章 主音節

(Accent tonique)

一七二、主音節即ちアクセサントニクとは一語の中の或一綴の音を揚げることをいふので(其音に力を入れることをいふので)一語の中には唯一處しかないものである。佛蘭西語に於ては此アクセサントニクは常に最後の綴りに属するものとなつて居る。唯最後の綴りが全く無音(muette)の場合には其直ぐ前の綴りに行く。假令ば possible, vendable の二語に於けるアクセサントニクは si と de にありて, parlons のアクセサントニクは Ion に, partie のアクセサントニクは par にあるのである。chandelle と s 字では e に力を入れて elle がアクセサントニクを持つけれども、

一七三、其轉語 chandelier となればアクセサントニクは e の方に力が入つて、e がアクセサントニクを持つ様になるから、前の elle の時の様に e が の響を持つこと出来なないことは當然である。即ち前の字は「シャンドール」と「エル」に力が入つたけれども、後の字となれば「シヤンズリエ」となつて前の e は g と變つて、語尾に「エ」と力が入るのである。

一七五、bateau, chameau, chapeau, 及び couteau の様に「エ」「シャ」「シャ」「エ」に力の入つた字も之が轉じて bachelier, chanelier, chapelier, coutelier となれば其アクセサントニクが終りの方へ移つて行くことは前の chandelier の例と同様である。

### ○第三十章 發音の連續

(Liaison de la consonne finale avec la voyelle initiale du mot suivant.)

一七六、第十一章にザンと説て置いた兩語の間の發音の連續を此處で稍詳しく述べやうと思ふ。一般の規則——或一つの語尾の子音と其次の語の初めにある母音とは、其間を妨げるものゝ無い限りは發音を連續させてよい。

此規則に對する種々の場合を調べれば次の通りである。  
定詞(名詞)の意義を定むる詞と名詞若くは其名詞に附着して居る形容詞との間の連続

一七七、 Les amis (レザミ) Mes excellents voisins (メヌキセルラソザザン)

Oes oiseaux (セフアゾー) Autres idées (オートルデアデー)

Mes armes (メザルム) Cinq amis (チソカミ)

Un enfant (アンファン) Six ânes (シザース)

Des enfants (ヂザソフアン) Cet arbre (セタルツル)

一七八、 形容詞と名詞との間の連続

Le petit oiseau (ルプティオゾー)

Les jolis enfants (レジョユザソフアン)

Des livres amusants (ヂリヴァルザミユザン)

一七九、 主格の地位にある代名詞と其働詞との間の連続

Nous avons (ヌーザヴァン) Ils ont (イルオン)

Vous avez (ヴーザヴェー) Elles ont (エルフオン)

一八〇、 働詞と之の尤も近い關係を持つ居る代名詞(形容詞)或は分詞との間の連続

Apportez-en (アポルテズン) Vous êtes actifs (ヴーデュートザクティブ)

Allez-y (アルヴェズ) Il est aimé (イルテメ)

一八一、 形容詞(分詞)或は副詞と其語義を定むる副詞との間の連続

Très amusant (トレザミユザン), Fort aimé (フォルテーム)

Fort aimable (フォルテームアブル), Assez estimé (アセズエスティメ)

Très éloquemment (トレデューロカソフアン) Horriblement ennuyeux (オルリテブルヴェンヌイユ)

Fort habilement (フォルタビールマン) Admirablement écrit (アドミラブルマンチクリ)

一八二、 働詞と其ロマンマン(第五十七節参照)との間の連続

Apportez une alouette (アポルテヌアルユエット)

Diner en ville (ヂネーランボル)

一八三、 結合辭の中の逆續 Pot à tabac (ポタタバク) Petit à petit (プティタプティ)

- 一八四、 Mot à mot (モタモ) C'est-à-dire(セタゾール)
- 前置詞副詞或は接續詞と之に續く言葉との間の連續
- Après avoir parlé(アアレガアタールヌル)
- Sans elle (サンヌル),
- Puis il sortit(ピイイソールヌル)
- Mais enfin.(マ-ザンファソ)

○第三十一章 前章の續か  
(Suite)

- 一八五、 兩語の間の發音を連續する場合には「ト」は「タ」行の響を與へ「ド」は「タ」行の響を與ふ
- Trois amis(トロアザミ) Grand arbre(グランドアルブ)
- Deux insectes(ドゥ-ザンヌクト) Grand homme(グランドム)
- Six hommes(シツム)

- 一八六、 連續の際gにhの響を與ふることあり  
Long amas(ロングアマ)
- 一八七、 數形容詞 neufの語尾のfは母音又は無聲のhに續くとキア音となる。  
Neuf ans(ヌ-ヴァン), Neuf heures(ヌ-ヴァール)
- 一八八、 接續詞 etの語尾のtは決して其次の語と連續して發音するノことなし。次の二例を見よ  
1. Un vieil ami est un bon camarade. (アンヴィエイラミエスタボンカマラド)  
(アンヴィエイラミエスタボンカマラド)  
或語が子音で終るとも其次に onze, onzième といふ語が來るときは發音の連續を行はず。  
\*Arrivez vers les onze heures (アリヴェールレオンヌエール)  
J'ai perdu mes onze francs (ゼーペルズヌオンスフランソ)。  
Les six onzièmes (レシクオンヌイム)
- 一八九、 (尙ほ第十一章を参照せよ)

○ 第三十二篇 例  
(Exercice)

140

1. Cette histoire (t, t) 1 7 1 7 - 1) n'est pas vraisemblable.      2. Le grand éléphant!
3. Est-ce que le pharmacien sait(7 2 -) la physique?      4. Jusqu'où (7 2 7 2 -) va ce tramway?      5. J'ai trouvé cet oignon et ce champignon près de la vigne.
6. Quel magnifique oignon d'Espagne!      7. Le singe est un quadrumane.
8. N'arrives-tu pas de Québec?—Non, je viens de l'Équateur (Amérique du Sud).
9. Quelle ville connais-tu?—Je connais Lille, Amiens, Boulogne, etc(2 1 7 1 7).
10. Sa fille est bien tranquille, mais sa nièce n'est pas gentille.
11. La caïlle n'est pas un gros oiseau.      12. La grenouille est un reptile aquatique.
13. J'ai mal à l'œil.      14. Le roseau est une plante aquatique et la nymphéa est une plante aquatile.      15. La consonne gn, en italien, a toujours le son mouillé.      16. Le héros entraînait dans le ciel par la voie lactée.      17. Le hibou est un oiseau nocturne.

18. Son habit est trop court.      19. L'aigle a la suprématie sur les autres oiseaux.
20. Quelle minutie!
21. Apporte-moi un kilo de chandelles.      22. Tu n'as pas de chandelier.
23. Ce couteau ne coupe pas.—Porte.—Je chez le coutelier,      24. Tu as là un joli chapeau.—Je te recommande mon chapelier.      25. Les Anglais sont excellents marins.
26. Nous n'aimons pas les romans ennuyeux.      27. Vous êtes arrivés avant eux.
28. Nous avons six oncles en Espagne.      29. Était-il neuf heures quand vous êtes entrés?—Oui, et il était dix heures lorsque nous sommes sortis.      30. Deux grands hommes se mirent(2 - 1) à brailler.
31. Ces vers sont très entraînants, traduisez—les mot à mot.      32. Les bons livres sont des amis.      33. Nous avons de dignes voisins et de bons amis dans notre nouvelle rue.      34. Nous avons retrouvé nos onze louis.      35. Après avoir complètement achevé ces exercices de prononciation, nous entreprendrons les leçons des mots qui constituent la deuxième partie de ce livre.

“L' étude est la vie de l'esprit.”

注 意

此發音篇を終るや否や、讀者は直ちに第二篇第十章の働詞に移り、其處に佛語に關する大體の知識を得て然る後初めの第一章に戻るべし。これが此文典を學ぶに就て取るべき最良の順序である。それより一章を終へ第二章を學び、三章四章と進みて第十章に達したならば、又一度其章を繰り返して働詞に對する知識を鞏固にせよ。斯くせば佛語は最早諸君の親友となり了るであらう。

第二編 (Deuxième Partie.)

語 論 (Des Mots)

一九一、吾輩は此編に於て、語其物の性質のみならず、其語と他の語との關係をも合せて論じやうと思ふ。斯くすることは方法家の取る方法としては極めて普通のものではないが、去りとて決して背理のやり方ではない。何故といふに、或語の性質といふも價值といふも畢竟相對のもので、絶對として見るべきところは少しも無いのであるから、他の語との關係を離れては、一語の説明をも出來得やう筈が無い故である。

一九二、であるから、語論 (science des mots 又 lexicologie) の外に別に章句論 (syntaxe) を置くて文法を論ずる人でも、其語論の中に、或語と他の語との關係を説かない譯には行かない。即ち syntaxe を此處に持ち出さなむ譯には行かないのである。syntaxe といふ語は希臘の *synthesis* といふ語から來たので、(羅句の *coordinatio* と相當して居る。) を平たく譯すれば *arrangement d' une chose avec une autre chose* といふ

とて、或物を他の物と共に排列するといふことになるのである。之を簡短にいひ直せば、或物と他の物との関係で、言葉の場合に於ては一語と他の語との関係である。すでに此關係、即ち *syntaxe* の一部を語論の中で論ずるものとすれば、別に *syntaxe* の部を置くこと置かないとの區別は、語論の中で一語と他語との關係を一步踏み込んで論ずるか、將た其を或程度に止めて之を別に論ずるかといふ丈の相違に過ぎないから、何れの道を取るも大した差は無いが、此文典位な大きさの冊子としては成るべく題目を少なくして、一題の下に其種々の方面を説くやうにしたい方が却て便利であらうと思ふ。

佛蘭西文法に三つの難關がある。吾輩は此三つの難關即ち冠詞と、名詞の「性」と、働詞とに特に力を用ゐたいと思ふ。

### 第一章 冠詞

(De l'article)

冠詞といふ者の無い國語は世界に甚だ多い位故、一般に言語といふ點から見れば

一九四、

一九三、

ば冠詞は決して重要なものとはいへないのみならず、此冠詞を持って居る國語から考へても、名詞あつて然る後冠詞ありて、冠詞は名詞に附随したるもの故、第一番に冠詞を持ち出すといふことは賞めた仕方でないかも知れぬ。シカシ、前にも述べた通り、佛蘭西文法に於ては、冠詞は其難關の一つであつて、殆んど佛蘭西語の鑰といつても善い位重要視せられて居る上に、形式上常に名詞の前に置かるゝものであるから、先づ讀者の注意を此處に惹くのも一法だらうと思つて十品詞中の先登第一といふ名譽をこれに與ふることとした。

#### 其定義 (Definition)

冠詞の定義は古くより文法家又は哲學者の頭を悩ました者の一つで、*ビニッフィー*、*ドリエ*、*フロマン*、*デュシロ*、*デュマルセー*、*シラル*、*コンダック*、*レギザック*、*ラブー*、*ダサシー*、*シロー*、*デュ非非エ*、*ナボレオン*、*ランデー*、*ベシユレル*、*ポアタヴン*、*ノエル*、*エ*、*シャブサール*などの諸大家及其他の諸氏の説を一々列擧したならば、定義丈でも既に本冊子の數十頁を塞ぐことを得る位である。其中、最も幼稚な定義として見るべきは、十七世紀の下半期に居た *レニエ*、*ダマレー*、十八世紀の上半期及下半期に居た *レ*

一九五、

一九七、

ストーリーやロモンなどの説で、冠詞は性と数とを表はす爲めに名詞の前に附け加へらるゝ一小語であると説いて居る。それから進んでデュマルセイ、コンヂヤックなどは冠詞を「名詞の語義に幾分の變化を與へ」(modifier les substantifs) 且つ其意義の廣さを指示するものとして解釋して居る。ラルースは之を、或普通名詞の意義が限定されてあることを表はす爲めに其前に置かるゝ語と解釋して居る。即ちレ非ザックと殆んど同説である。ラリーヴ及フリーリーも矢張同説を持て居る。レニエ、デマレー等の説は、男性にも女性にも、單數にも複數にも等しく用ゐらるゝ英語の *le* といふ冠詞などには全く適用の出來ない、極めて幼稚な説であることはいふまでもないが、デュマルセイ、コンヂヤックなどの説とて、指示形容詞の解釋と殆んど選ぶところのないもので、感心は出來ない。レ非ザック、ラルースなどの説となれば、余程發達したものと考へらるゝが、まだ充分とは認められない。そこで吾輩は、デュロと大抵同説で、一層完全なりと思はるゝレゼー、ノエルの説を擧げて之を讀者に紹介しやう。

一九六、

氏曰く、冠詞の本能は、實物を表はす様に名詞を限定することゝ、其(冠詞)の附着す

一九八、

る凡ての言葉を實名詞(實物)化することゝしてある。(Le propre de l'article est de déterminer les noms à représenter une substance, et de convertir en substantifs tous les mots auxquels il s'attache.)<sup>2)</sup>

(備考) *ラハロ*の説は、冠詞は其次に来る語を實名詞化する爲に用ゐらるゝ(article sert à substantifier le mot qu'il précède.) といふので、其語即ち冠詞の附着して居る語は、實物と考へらるべきもので、決して抽象的と考へらるべきものでないことをいひあらはして居るのであつて、レゼー、ノエルの説と殆んど同様である。

一九九、

吾輩は此説を尤も完全なものと認める。が、これ丈では充分頭に入るまいから、此定義の説明を少しく與へて置かう。此定義を善く了解するには、實名詞(實物名詞、實體名詞、實質名詞)といふ言葉の意義を善く了解せなければならぬ。又此實名詞といふ言葉の意義を了解するには、此言葉と單に「名」といふ言葉の區別を了解せなければならぬ。單に「名」といふば名詞といふも同じことなれど、此名詞といふ言葉は實名詞

二〇〇、



の意味に使用することが多い故、曖昧を避ける爲に「名」と斗り書いて置く(總ての言葉は皆「名」である。「私」といふも「汝」といふも「正」といふも「不正」といふも「善」といふも「惡」といふも「擧つ」といふも「撫つ」といふも「甚だ」といふも「僅か」といふも有形無形、動作状態等の差こそあれ、皆「人」とか「物」とか「パン」とか「水」とかいふのと同じことに夫れ、の事物の名である。

二〇一、

此等の名をいふのに日本では唯一通りのいひ方しか無いが、佛蘭西では二通り、のいひ方がある。即ち唯、其名の言葉斗りをいふのと、これは日本のいひ方と同じ、其名に冠詞をつけていふのと、二通りである。(日本にも、「あづさゆみ春」とか「鳥がなくあづま」とか「山の井の淺し」とかいふ様に名、の言葉に枕言葉をつけていふ例があるけれど、其とは意味が違ふ。此第二の言ひ方の類例を強て我國に求むれば、稍や近い言ひ方が、或名に「此」とか「其」とか「彼の」とかいふ言葉を添えて、「此木」、「彼の山」、「其林」といふ様にいふのと似て居る。同じくは無いが唯似て居る。今佛蘭西語の *homme* といふ言葉に就て調べて見やうならば、唯 *homme* (人) と斗りいへば、極めて漠然と、抽象的に「人」といふ者といふ位な意味であるけれども之に冠詞を

二〇二、

添えて「*l'homme*」といへば、最早漠然たる意味ではなく、無形ながらも「此人其人」と一人に限らぬ場合には、自分の考への目的として一個の物となつて現はれて來たものを指すこととなるのである。假令ば「*Vous êtes homme*」(貴方は人である)といふた場合には、此 *homme* 即ち人といふ意味は「人類」と名の付くもの、「一人」といふ程の心持で、其物が自分の考への目的となつて心の前に現はれて來て居る譯ではない。然るに「*L'homme est mortel*」(人は死すべきものである)と、冠詞をつけていふた場合には、此「人」といふ語が人類全体を代表して、一個の物となつて考への目的として心の前に現はれて來るのである。若し又初の例に冠詞を付けて「*Vous êtes l'homme*」といへば、其次に「*dont on m'a parié*」といふやうな言葉を加へらるべき定まつた人となるのである。別に冠詞といふもの、無い日本語でも、是等の言葉をいふ際に善く其意味と心持とを味はうて見れば、佛蘭西語に於けると略ぼ等しい位の差異のあることは了解出来るであらう。「*pain*」と「*le pain*」、「*vin*」と「*le vin*」など皆同じ差を持って居るのである。

二〇三、

らうとも、凡て實物的の性質を持つので、之を實名詞と名ける。  
此實名詞と「名」とは同意義でない。「名」は唯名丈であるが、實名詞は、少なくとも心  
の中では極くきつばりした、精確な、特に注意に値する實物であるのである。コン  
グヤックが、或成文の主格となる名詞は凡て實名詞である」といつたのは實に銘言  
である。

二〇四、

是丈いへば實名詞と唯の名詞即ち「名」との差異は明かとなつたであらうし、従つ  
て、實名詞の意義も了解し得たであらうから、今譲つて前に與へた、レゼー、ノエル  
の定義を一讀すれば、冠詞の性 は明瞭に頭に入るであらう。

それから、尙一つ注意して置きたいことは、本來名詞で無い言葉でも、之に冠詞を  
被らせれば名詞として使ひ得るといふことである。同定義の終りに *de convertir*  
*en substantifs tous les mots auxquels il s'attache* と誓ひてあるのも其意味で、形容詞  
代名詞、働詞、副詞の様なものでも、名詞と同様凡て實名詞化せらるゝのである。  
*le beau, le moi, le manger, le boire, le trop* と云ふやうに。

二〇五、

斯く實名詞として現はれて來るものは文法上では唯一物の形を取るけれども、

論理上では三つに分たねばならぬ、冠詞は三つとも同じに用ゐらるゝが、其三つ  
といふは、一類全体と、其中の一種全体と、一個物との三つである。假令ば *l'homme*  
*est mortel* と云ふ時の *l'homme* とか、 *ni l'or ni la grandeur ne nous rendent heureux.*  
*(La Fontaine)* と云ふ時の *l'or* なり *la grandeur* なりは皆其一類全体を意味して居  
るのである。又 *l'homme faible se laisse gouverner par ses passions* と云ふ時の *l'homme*  
は人類全体でなく其 *l'homme faible* と云ふ一種を意味するところとなるのである。そ  
れから *l'homme qui nous fait* とか *la femme qu'on aime* とか云ふば、其 *l'homme* と *la femme*  
とは人類全体でも、婦人全体でもなく、唯自分等に諷ねる人と其愛する婦人との  
個体を指すこととなるのである。此等の三ツは皆集合した一個体として考ふる  
もの故文法上單數である。シカシ、此外 *distributif* といふがあつて、これは一種類  
中の數多の個体を集合した一物とせず、個体の儘分つて考ふる時に起る名稱で、  
此場合には複數の冠詞を用ゐて考へるの目的が多數であることを示す。假令ば  
*les grands sont comme les parfums : ceux qui les portent ne les sentent presque pas.*  
*(Christine de Suède)* と云ふ成文の中の *les grands* と *les parfums* とは共に全体

を意味して居るのでなくて、夥多の grandeur とするの parfum とを意味して居るのである。

二〇六、

唯名詞計りあつて、其をどれ丈の意味に取てよいか判然しない時に、之に冠詞が添えば、其名詞が上に挙げた様な實名詞となるのである。

二〇七、

そこで今一度詳しく定義を述べれば、

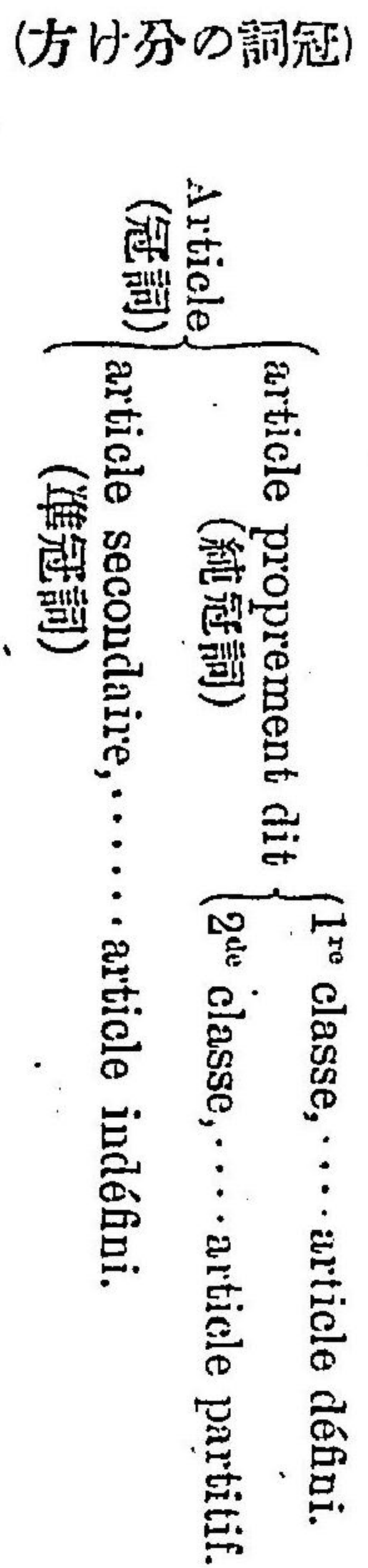
冠詞は、其斗りでは何の意味もない言葉だけれども、之が普通名詞の前に置かれると、其名詞に(其名詞が唯一語でも又は數多の語の集合したものであつても同じ様に)實名詞の性質を附與するものである、いひ換へれば其名詞が單一であると集合であるとを論ぜず、極くきつぱりした物、一個躰、一實物を表はす様に其名詞を限定して、之によつて、其名詞を其文の主格若くは目的格となる様にするのである。今一度いひ換へれば冠詞の本能は、普通名詞を個躰化して、其名詞を固有名詞(冠詞の助けを借らずして其詞丈で常に個躰を表はして居る固有名詞の位置にまで進めるものである。

冠詞の種類

(Des différentes espèces d'articles.)

二〇八、

多くの文法家は冠詞を唯一種と見做して居るが、吾輩は其を二種以上に分つて適當とすると信ずる。そして、其分け方に就ても、從來の文法家のした定冠詞、不定冠詞、部分冠詞 (article défini, article indéfini, article partitif) の分け方の上に(外にはない)純冠詞 (article proprement dit) 及準冠詞 (article secondaire) とするものを置て此中に上に挙げた定、不定、部分の三冠詞を籠めたいと思ふ。これは今迄に無い分け方なれど、原名を其儘存して置くから、他の文典を學ぶ際にも不便を感ずるといふことは無い筈である。附け加へて置く。



純冠詞 (Article proprement dit)

(一) 第一級冠詞(定冠詞)

(Première classe : article défini.)

二〇九、定義の條に詳しく述べた事柄が凡て此冠詞に適用されるべきことであるのだから詳しく述べなす。が此冠詞には三つの形も (trois formes) のあることを知らねばならぬ。即ち

le.....(男性の單數) }  
la.....(女性の單數) } les.....(兩性共通の複數)

例。

La finesse flotte entre le vice et la vertu.

Distinguer le moi d'avec le non-moi.

Les hommes bons sont rares.

二一〇、冠詞の截去 (elision) 及縮合 (contraction).

冠詞に截去及縮合といふ二様の變化がある。

二一一、截去といふは第四十七節に述べた通りに le, la の語尾の e と a とを略して略字符 (apostrophe) を以て之に代へることをいふのである。假令は

le esprit, la amitié, le homme, la humanité の代りて l'esprit, l'amitié, l'homme, l'humanité と書く如きなり。

二一二、縮合といふは冠詞 le, les が前置詞 à, de と會ふとき兩方が相抱合して一語を形成ることなり。即ち

à le が au となり } 此二縮語は子音又は有聲の l の前に用ゐらる  
de le が du となる }  
à les が aux となり } 此二縮語は男女性共の複數の前に於て、凡ての  
de les が des となる } 場合に用ゐらる。

例。

à le village の代りて au village

à le hameau の代りて au hameau

de le village の代りて du village

de le hameau の代りて du hameau

à les oiseaux の代りに aux oiseaux  
 à les fruits の代りに aux fruits  
 à les héros の代りに aux héros

de les oiseaux の代りに des oiseaux  
 de les fruits の代りに des fruits  
 de les héros の代りに des héros

其用法 (Emploi.)

二二三

第一級冠詞(定冠詞)といはるゝものは前にも詳しく述べた如く常に正確に考へ  
の前に現はれて居るもの前に用ゐらる。假令ば

*Le directeur* donne sa leçon といふば此 *directeur* は自分等の *directeur* か又は善  
く知て居る人て其人に就て前に話されたとか又今話して居るとかといふ時に  
用ゐられるのである又 *l'inspecteur* est sévère, mais juste といふ時の *inspecteur* も

二二四

同じことである。

シカシ、一層善く此冠詞の意味を解らすには次の様に例の比較をするのが一番  
であらう。即ち

1. *Donnez-moi un peu de vin.*  
*Donnez-moi un peu du vin*(qui est dans cette bouteille.)
2. *Donnez-moi une livre de beurre*  
 " " " " *du* " (qui est dans ce tonneau.)

此第一の例の冠詞の無い *vin* は唯漠然と酒といふことを指して居るのである  
けれど冠詞のある方 (*du vin* = *de le vin*) は其處にある酒壺を指して其酒を少々  
下さうといふのである。

又第二の例の「*ベタ*」も同じこととして一方の冠詞の付かない方はどれとも限らず唯  
「*ベタ*」を下さうといふのだけれど冠詞の付て居る方は其入て居る器物を指して  
此「*ベタ*」を下さうといふので之をいふた人の考へには此「*ベタ*」がキツパリと現はれ  
て居るのである。

二二五、

シカシ次に擧る例の様に、準冠詞(不定冠詞と呼ばれるもの)と殆んど同じ意味に用ゐらるゝこともある。

Cet homme a <sup>de</sup> la mémoire fidèle.

” ” une mémoire fidèle.

Ce papillon a les ailes rouges.

” ” des ailes rouges

Cet arbre a le tronc noueux.

” ” un tronc noueux.

Cet homme a les yeux bleus.

” ” des yeux bleus.

此等は全く習慣の然らしむるところで、極く微細な差異の外全く同様に用ゐられるのである。

又、或器物を其内容に關係して呼ぶ時、或は現在用ゐられて居る有様によつて呼ぶ時、或は或場所を其處に集められて居る品物に關係して呼ぶ時に第一級冠

二二六、

詞を用ゆ。假令ば

La boîte au (à le) thé. La corbeille au pain.

La boîte aux lettres. La halle au blé.

Le marché au foin. Le marché au poisson.

Le marché aux chevaux. Le pot au lait.

二二七、  
されど、其器物が或物で充されて居ることをいひたい場合には冠詞を用ゐない  
て唯 de を用ゐる。即ち

Un pot de lait. Un panier de cerises.

Un verre de vin.

二二八、  
然し其器物が何に用ゐらるべきものであるといふ目的斗りに關係して其  
を呼ぶ場合には唯 de を用ゆ。假令ば

Une boîte à thé. Une corbeille à pain.

Un verre à bière.

又其物の性質に關係して呼ぶ時も同様である。

二二九、

Un bateau à vapeur.                      Un moulin à vent  
Le serpent à sonnettes.                      Une vache à lait.

二三〇、人或は物を、其物質的狀態或は無形的狀態によつて呼ぶ時、又は食物の種類を分つ時、又は商賣人を相互から分つ時に第一級冠詞(定冠詞)を用ゆ。即ち

L'enfant aux yeux bleus.                      Un gâteau aux pommes.  
L'homme au masque de fer.                      Une soupe aux pois.  
La femme aux œufs.

二三一、又 mode と s 々 字を略して次の様に書くことあり

Shabiller à la (mode) française.  
" " l' espagnole.  
Un chapeau à la François 1<sup>er</sup> (à la mode de François 1<sup>er</sup>.)  
On nous servit un diner à la turque(à la mode turque.)

二三二、左の二文を玩味せよ。  
1. Faites venir le médecin des enfants.

2. " " " " des enfants.

第一の方の意味は、「外に醫師はあるけれども子供の方の醫師を呼んで来い」といふ意であるが、又子供の好た醫師で、其を親がつひ子供の醫師と名をつけた場合に *le médecin des enfants* と s 々

第二の *médecin d'enfants* と s 々 は「小兒醫師」といふと同じこととして小兒科専門の醫師といふのである。

二三三、一般の規則としては、固有名詞の前には冠詞を用ゐない。シカシ、左に擧る場合には之を用ゐる。

第一 人の名の前に形容詞の付た場合

*le grand César*

第二 伊太利の詩人の名、有名な歌ひ女又は有名な婦人の名をいふ場合に、  
(此規則は必ずしも守らなければならぬといふことは無いやうになつた。明治三十四年三月、發布の佛國文部省)  
*le Dante* (有名な學者 ヲ、トレ(Littre) は此 Dante の前に冠詞を付けることを非難したけれども慣例は付ることゝなつて居る)

*le Tasse, l' Arioste, le Tihen, le Corrége, le Poussin, (これは佛蘭西の畫家である。例外) la Pôti, la Bosio, la Rachel.*

【第三】船の名美術の大作書籍の名

*Le Neptune est un beau navire. (船名)*

*Le vaisseau la Méduse est devenu la proie des flammes. (船名)*

*Le Rubens que vous possédez est superbe. (畫名)*

*Nous lirons le Télémaque de Fénelon. (書名)*

【第四】昔しの有名な人を引合に出して之と同じ様な人を云々する場合に其有名な人の名の前に。

*Les Virgiles sont rares.*

*Les Souverois ne se rencontrent dans l'histoire qu'à de rares intervalles.*

【第五】同姓全体を擧げたり時其姓の前に。

*Les Sturats, les Bourbons, les Tudors.*

【第六】「京都は日本の巴里である」といふ様に同階級の人を表はす爲に相手と

して引出される人名の前に。

*Lemonossoff est le Malherbe de la Russie.*

【第七】都府名に形容詞の付た場合

*Le vieux Paris. Le Paris d'aujourd'hui.*

*L'antique Rome. La belle Florence.*

【第八】國名河川名山海の名及方角(東西南北)の名

*le Japon. la Seine. l'Archipel.*

*la France. le Rhin. la Baltique.*

*l'Angleterre. les Alpes. l'est. le sud.*

但し島名に就ては一定の規則なし

*la Sicile, la Sardaigne, la Corse,*

*l'Islande, la Martinique* 等冠詞の有るものもあれば又

*Cuba, Bornéo, Java,* 等冠詞の無いものもある。

【第九】月の名には冠詞を用るぬが例なれども之に形容詞の添はる時は冠詞



を用ゐる。

*Le riant mai,*

*Le mi-juin.*

*Le froid décembre.*

第十 現在の其日より一週以上隔たつて居る日を名指す時は其日の名の前に(過去未来とも)

*Le samedi 24 Novembre, nous sommes partispour Paris.*

*Le " " " " partirous " "*

第十一 手紙の日付けの前に

*Paris, le 12 juin 1902.*

*Paris, le 12 juin.*

三四 名詞の前に *en* とする前置詞あるときは其名詞の前に冠詞を用ゐるぬが例なれども其名詞に尙ほ他の語が添うて居る場合には冠詞を用ゐる。即ち

*Je ferai un voyage en automne.*

*" " " " en hiver.*

*" " " " en été.*

*En l' état où je suis.*

*En des pages intéressantes.*

*En l' année 1900.*

*En un lieu agréable.*

*En l' absence de ma sœur.*

三五

第一級冠詞は英語の *the* 獨逸語の *der, die, das, die,* に相當す。

(二) 第二級冠詞(部分冠詞)

(*Seconde classe: article partitif.*)

三六

第一級冠詞が或一類一種のものを全体として現はす様に、此第二級冠詞は種類の一部を現はす。それ故第一級冠詞と第二級冠詞との關係は全体と部分とである。元來部分は測るべきもので數ふべきものでない。數ふべからざる物には複數のあるべき道理がなからず隨がつて此第二級冠詞には複數がないのである。 *pain, vin, eau, feu, air, lumière, or, argent* などは全体と部分とに分つべきも、幾個として數ふべからざるものゝ好適例である。即ち *le pain, du pain, le vin, du vin, l' eau, de l'eau, les pains, les vins,* などと云ふべからざるものがある。然るに *des*

を此第二級冠詞(部分冠詞)の複數であると主張して居る人が随分少なくないが其は全く間違つて居る。desは準冠詞(不定冠詞)の複數で第二級冠詞の複數ではなす。

此冠詞を純冠詞の中に入れた理由は、此冠詞と第一級冠詞との差は唯全体と部分との差がある斗りて、極めて明確な目的物を心意の前に持ち來すことは共に異なるところが無いからである。

二二七、 此冠詞は二つの形ちを持って居る即ち

du..... 男性  
de la..... 女性  
複數なし。

例。

du pain, de la lumière.

二二八、 此二つの形ちが母音又は無聲のyの前に行くときは音調の爲めに、

de l'

の形ちを取るに至ることはJe, la計りの場合と同じことである。

例。

de l' air (男性) de l' eau (女性).

二二九、 第二級冠詞は英語の some(時としては any)に相當し、獨逸語の etwas に相當す。

其用法 (Emploi)

二三〇、 此冠詞は第二百廿六節に述べた通り、或種類の部分を一ひ表はしたいときに用ゐられる。即ち

Donnez-moi encore de la viande, je vous prie.

といふ文章があれば(食卓に向つて居る時)此意味は、此テーブルの上にある  
全体の中の或部分を下さうといふのである。又

Je veux acheter du beurre dans votre magasin.

といふのは貴方の店にある凡てのバターの中其一部を買ひませうといふ意味である。

二三一、 此第二級冠詞と第一級冠詞の物主格 (génitif possessif) となつたものとを混合してはならない。此第二級冠詞の原を尋ねれば第一級冠詞の物主格から來たもの

に相違ないけれども、今となつては其用法が全く異なつて居るのである。文章の意味を見れば其區別は直ちにわかる。即ち

Donnez-moi du pain.

” ” de la viande.

Avec du temps et de la patience

ou vient à bout de tout.

La croûte du pain.

Le toit de la maison.

Le palais du prince.

第二級冠詞を用ゐた例。

第一級冠詞の物主格を用ゐた例。

【注意】此處に物主格といふことを書いたけれども、佛蘭西語には、羅旬語や獨逸語の様に、正確な意義の格といふものはないのである。日本語で「子供の本」とか「戸の鍵」とか「酒の糟」とかといふときの「の」といふ字に相當する言葉を、從來の言ひ慣はしに従つて、便利上物主格と名けたのである。以下倣之。部分の意味して居る實名詞に形容詞の添ふ時は第二級冠詞の代用として de

二三二

のみを用ゆ。假令ば、

Donnez-moi du pain.

” ” de la viande.

” ” du vin

Donnez-moi de bon pain.

” ” de bonne viande.

” ” de meilleur vin.

形容詞の添はぬ場合

形容詞の添うた場合

(明治三十四年三月九日發布の佛國文部省令で形容詞の添ふた場合にも de la を用ゐて支障ないことゝなつた)

前節の様に形容詞の添ふ時といへども、其形容詞と實名詞とは離すことの出来ないほど密着の關係を持って居る場合には矢張第二級冠詞を用ゆ。

Cet homme a du bon sens.

Il montre de la bonne volonté.

Voilà deux sortes de vins, en voulez-vous du bon ou de mauvais ?

二三三

二三四、 第二百卅二節の様な場合に於て其性質に就て特に注意を引きたいと思ふときは矢張前節と同様に第二級冠詞を用ゆ

Voilà de l'excellent vin!

„ de la bonne viande!

Voilà de la vraie poésie!

二三五、 實名詞が否定狀の働詞に伴なふ時には、第二級冠詞の代用として *de* のみを用ゆ。

Il y a du pain sur la table.

Il n'y a pas de pain sur la table.

Il tombe de la neige.

Il ne tombe pas de neige.

Je mange de la viande.

Je ne mange pas de viande.

Point d'argent.

point de Suisse.

二三六、

**除外例** 前節の様な場合に於ても反對の意味を述べやうと思ふ時は *non* seulement... mais encore を用ふる場合には第二級冠詞を用ゆ

Je ne vous demande pas de l'argent, mais des conseils.

Il n'a pas seulement pris de l'argent, mais des bijoux, du linge et tout ce qu'il a pu emporter.

**準冠詞 (不定冠詞)**

(Article secondaire: article indéfini)

二三七、

此冠詞が第二百七節の定義の様に、或名詞を實物化し個体化する働きは純冠詞と變ることは無いけれど、之を考への目的物として心の前に現はす時の其現はし方が甚だ漠として、純冠詞の様なきつばりした譯にゆかないから、冠詞の定義に對する適切な度がどうしても純冠詞よりは薄い譯である。吾輩が之に準冠詞の名を與へたのも此理由に過ぎない。

文法家の中には全く此冠詞の存立を認めないで、之を數形容詞の中に組込む人がある。而も其數が甚だ多いけれども吾輩は其等の人に同意しないのである。尤

二三八、

も数形容詞の *un* と此冠詞の *un*, *une* と同種類の字で其用法も余程似て居るところの多いことは争はれない事實であるが之を同一と見ることはどうしても出来ない。試みに其例を挙げやうならば、

*Combien avez-vous de chevaux?—J'en ai un.*

と、*un* 時の *un* は明かに数を意味して居るけれども之と

*J'ai vu un cheval*

と、*un* 時の *un* とは全く同意義であらうか。况んや

*Un jour, Schemseddin était assis dans sa boutique et regardait ses voisins qui avaient tous le bonheur d'être pères;.....*

*C'était un vendredi; ce jour-là, suivant sa coutume, Schemseddin alla au bain, se fit arroser d'eau de senteur, et raser les cheveux et tailler la barbe.*

の中の *un jour* と *un vendredi* との *un* は決して「一」といふ数に力を用ゐたのでなくて唯、或日、或金曜日といふ風に、或といふ意味に *un* を用ゐたものであることは誰の目にも明であらう。又一つ例を出せば、

二三九、

*Une joie excessive a les mêmes symptômes qu'une excessive douleur.*

といふ文の中の *une joie*, *une douleur* は喜びや悲しみを一つ二つと數へて其有様を述べたのでなく、喜びの中の或ものと悲しみの中の或ものとを引き出して之を比較したものであることは明白であらう。左すれば斯様な場合の *un*, *une* を盡く数形容詞の中に組み込むのは正しい仕方ではないといはなければならぬ。即ち冠詞と数形容詞との區別を認めねばなるまい。吾輩が此冠詞を必要とするわけは其處に存するのである。

此冠詞には三つの形がある。即ち、

*un* (男性の單數) }  
*une*(女性の單數) } *des* (兩性共通の複數)

例。

*Un sot savant est plus sot qu'un sot ignorant.*

*La paresse est une dangereuse sirène.*

*Des époux mal assortis se torturent.*

二四〇、  
準冠詞不定冠詞の單數は英語の *a, an* に相當し、獨逸語の *ein, eine, ein* (及其變形) に相當す。

又其複數は英語の *some*, 獨逸語の *einige, mehrere* に相當す。兩國語とも不定冠詞としての複數なし)

其用法 (*Emploi*)

二四一、  
其用法の大體は第二百三十七、八節の議論で解つたであらうが、尙ほやゝ詳しく説明すれば、

此冠詞は普通名詞(實名詞)の前に用ゐる譯だけれども、固有名詞も普通名詞狀に用ゐらるゝ時には其前に用ゐられる。即ち、

*Un Auguste aisément peut faire des Virgiles.*

之を普通名詞で書き換へれば次の様になる。

*Un intelligent protecteur des arts et des lettres peut facilement créer des poètes.*

二四二、  
談話或は文章の中初めて用ゐらるゝ人或は物の名の普通名詞の前に此準冠詞

(不定冠詞)を用ゐる。

*Un enfant élevé dans un pauvre village, revint chez ses parents et fut surpris d'y voir un miroir.*

但し、一度述べて其言葉即ち其名が已に知られた上は、二度目からは純冠詞の第一級(定冠詞)を取る。

二四三、  
第二百四十一節と大同小異で、或資格性質を述べる爲めに、其に相當すると認める古人の名を其儘用ゐる場合に

*C'est une Agnes.* (此 *Agnes* は無邪氣な處女といふ意に用ゐたものである。)

*Un Démophile.* (雄辯家といふ意)

*Un autre Alexandre.* (拔群な將帥といふ意)

*Une Lucrèce.* (貞淑な婦人といふ意)

二四四、  
叙述に力を添ふる爲に人名の前に用ゐることがある。

*Ces grands généraux, un Turenne, un Condé,* 等。

二四五、  
C'est に續く實名詞の前に此冠詞を用ゐる。

二四六

*C'est un Français, une Anglaise, etc.*  
nombre, force, quantité, foison などの語の前に冠詞を用ゐず。

*Le loup dévora force moutons, quantité d'agneaux, nombre de bergers.*

右と同様に冠詞を省くことあり。

*Il y a bel ce soir chez le ministre de souper chez l'ambassadeur.*

二四七

*Jamais* と *とゞ* 字を用ゐる際、叙述に力を添へる爲に冠詞を抜くことがある。

*Jamais guerrier ne fut plus brave.*

*Jamais victoire ne fut plus chèrement achetée.*

尤冠詞を用ゐる下の様は昔よりもよすがが力は弱し。

*Jamais un prince se conduisit-il comme vous le faites ?*

二四八

準冠詞(不定冠詞)の複數 *des* は元來 *de les* の縮合に成つたもので其形からいへば極めて第二級冠詞(部分冠詞)に縁が近い丈其働も余ほど似て居るところがある。即ち

*Donnez-moi du pain, de la viande, du lait, de l'argent.*

と *とゞ* と同じ俱合に

*Donnez-moi des petits pois, des petits pâtés.*

と *とゞ* ののである。唯 *des* は幾個と數へ得る物に主として用ゐられる。

又 *petits pois* の例は第二十三節の一層適切な例となるのである。何となれば *petits pois* の *petits* と *pois* とは形容詞と名詞といふよりも此二詞が一つとなつて複合名詞を形成して居るといつた方が適當な位連結して居る言葉であるか  
△ (*petits pâtés* を同じ)

二四九

否定文の中に於ては *un, une, des* は屢 *de* て置きかへらる。

*Avez-vous un bâton*

*(Non, je n'ai pas de bâton.*

*Avez-vous une amie ?*

*(Non, je n'ai pas d'amie ?*

*Avez-vous des parents ?*

*(Non, je n'ai pas de parents.*

冠詞の位置及繰返し。

(Place et répétition de l'article.)

二五〇、冠詞は常に名詞の前に置かる(凡ての冠詞を意味す)

二五一、若し名詞の前に形容詞添へば冠詞は其又前に置かる。

*Les grands arbres. Les mêmes hommes.*

*Un brave homme.*

二五二、但し tout といふ形容詞が名詞の前に置かれた場合は除外例である

*Les hommes sont tous mortels.*

*Tous les hommes sont mortels.*

二五三、一般の規則とすべし冠詞は各該名詞の前に繰返さるべきものである。

*Les hommes, les femmes et les enfants étaient réunis dans le temple.*

*Le prince et les sujets, le riche et le pauvre, le fort et le faible sont égaux devant Dieu.*

二五四、一語が二つの性質を兼ね備へて居るときは其性質を表はすところの形容詞の前には冠詞を繰返さる。

*Le jeune et brave soldat(一A)*  
*Le jeune et le vieux soldat(二A)*  
{ *Le style simple et sublime(一種の style)*  
*Le style simple et le sublime(二種の style)*

二五五、*Le XV<sup>e</sup> et le XVI<sup>e</sup> siècle,* 或は *le 5<sup>e</sup> et le 6<sup>e</sup> chapitre* とすやうな場合に冠詞を繰り返さるべし之を複數にして *Les XV<sup>e</sup> et XVI<sup>e</sup> siècles; les 5<sup>e</sup> et 6<sup>e</sup> chapitres.* とすやうな風に書くことも宜し、近世此風を用ゐる人が多し。

二五六、同一の語を形容して居るいさゝかの形容詞の前に冠詞を繰り返しても宜し、こは其叙述に力を與へん爲である

*Voici l'unique et la grande règle qu'il suivait.*

*L'utile et la louable pratique.*

*Le suprême et le parfait gouvernement.*

*C'est un bon et un honnête homme.*

シカシ此第二の冠詞を省くことは自由だ。



二五七、

若し名詞の前にある形容詞の数が三つ以上であるときには是非冠詞を其各々の前に繰り返さねばならぬ。

*La belle, l'éclatante, la glorieuse conquête que vous avez faite sur les ennemis de la France.*

二五八、

〇とゝと接続詞の後にある名詞が其前の名詞の説明に過ぎない時は冠詞を繰り返す必要なし。

*Le jaquier ou arbre à pain croit dans ces îles.*

シカシ此規則は敢て嚴密に守らなければならぬ。

練習文 (Exercice)

二五六、

- 1. *Les enfants aiment le jeu.*
- 2. *L'ordre et la propreté sont des qualités qu'on ne peut trop recommander aux enfants.*
- 3. *Le héros véritable est l'homme qui joint la vertu au courage.*
- 4. *L'enfance est comme le matin de la vie.*
- 5. *La promenade excite l'appétit.*
- 6. *L'hiver est nécessaire au repos de la nature.*
- 7. *Le oui (l'*

oui (l'はな) qui est sorti de sa bouche n'était ni ferme ni franc. 8. *Le bonheur*

dépend plus du caractère que de la fortune. 9. *Tout est égal aux yeux de Dieu, depuis*

*le sceptre jusqu'à la boulette.* 10. *Ouvrir son âme à l'ambition, c'est renoncer au*

*repos.*

11. *La noblesse ne fut plus qu'idéale lorsqu'on put la faire avec de l'encre, du papier, et de la cire.* 12. *Avec du temps et de la patience on vient à bout de tout.*

13. *Toujours du plaisir n'est pas le plaisir.* 14. *La vie n'est que de l'ennui ou de*

*la crème fouettée.* 15. *Cela ressemble à du parchemin.* 16. *Je préfère du cidre*

*à de la bière.* (此 15. 16. の様な冠詞の用ゐる方は餘りせない。何故ならば、次の様に第一級

冠詞を用いた方が文章がよくなつて意義に相違が生ぜぬからである。即ち、*Cela ressemble au*

*parchemin. je préfère le cidre à la bière.)* 17. *“Vous nous avez fait avoir de l'or en abon-*

*dance, dit la reine, mais tout le reste nous manque.”* 18. *Là crainte donne aux*

*bêtes de l'esprit.* 19. *Amitié veut de la prudence.* 20. *La beauté de l'esprit*

*donne de l'admiration; celle de l'âme donne de l'estime.*

21. *Du bon livre est un bon ami.*      22. *La police doit être une mère, et non une commère.*      23. *Le plus grand obstacle à la fortune est une délicatesse de pensée.*
24. *Si la fin de Socrate est d'un sage, la mort de Jésus est d'un dieu.*      25. *Il en coûte moins à un homme fier de quitter la vie que de baiser la main d'un tyran qui lui fait grâce.*      26. *La nature nous a fait un besoin de l'occupation; la société nous en fait un devoir, l'habitude nous en fait un plaisir.*      27. *Si des phrases donnaient le bonheur, il y a long-temps que nous l'aurions.*      28. *La plupart des femmes sont des paons* (第百二十三節參照) *à la promenade, des pié-grèges* <sup>pié-grèges</sup> *à la maison, et des colomnes dans le tête-à-tête.*      29. *La liberté donnée à des peuples corrompus est une vierge donnée à des libertins.*
30. *Les heures, les jours, les semaines, les mois, les années, coulent comme les minutes et les secondes.*

### 第二章 名詞實名詞

(Du substantif.)

二六〇、

名詞は言葉の中の最も主要なるものである。其頭腦て又其體である。他の凡ての言葉は名詞を中心として其働らきを爲すもので、其從たるに過ないといつて宜し。

名詞を學ぶに就て尤も困難なるものは其性である。故に、此性に就ては比較的完全な説明を與へやうと思ふ。

之に次で困難なるものは數であるけれども、此方は左程に無い。

其定義 (Définition.)

二六一、

名詞實名詞は、有生無生有形無形の別なく、我々の思想の目的となる凡てのものを指していふ言葉である。即ち人、木、鳥、熱、善、勇氣 (homme, arbre, oiseau, chaleur, bonté, courage) などいふ言葉は凡て名詞である。

二六二、

實名詞の佛蘭西語が substantif 之を又 nom (名詞) と名ける其わけは或物を名づける (nommer) からである。

名詞の種類

(Diverses sortes de substantif

六 名詞には普通名詞 (substantif commun ou appellatif) と固有名詞 (substantif propre) との二種がある。

二六四 普通名詞 (substantif commun ou nom commun) と云ふは同種類の凡ての人或は凡ての物に等しく適用し得る名を云ふの如く animal, homme, femme, cheval, plante, arbre, livre, blancheur, idée など皆普通名詞である。

二六五 固有名詞 (substantif propre ou nom propre) と云ふは唯一人の人或は唯一個の物に只り適用する名を云ふので個人の名、姓の名、國の名、山の名、河の名等皆固有名詞である。即ち Racine, Fénelon, les Bourbonns, Paris, Tokyo, la France, les Alpes, le Rhin など皆此部類に属する。

二六六 此外第二位となる名詞の種類を擧げて見れば  
普通名詞の中に單數であつて複數の感をも與ふる名詞がある。假令は peuple, multitude, armée, régiment, forêt, flotte, troupe, troupeau, などの様な名詞である。此等を collectif と唱ふる。

二六七 それから moitié, とか dizaine とか云ふ語に特に partitif の名を與ふる人もある。

二六八 又名詞を sens collectif partitif と sens collectif distributif との二つに分けやうといふ説がある。

二六九 Sens collectif partitif の方は個物を考への中に置かなくて全體及部分といふものを見る仕方として homme, le boeuf, le mouton, le vin, le fer, など云ふやうに純冠詞(定冠詞部分冠詞)を載して居るものを云ふのである。何となれば "l'homme" と云ふば「凡ての人」人と名けらるゝ範圍に入るもの凡てを指して云ふので之を數ふる意味がないからである。他の le mouton や le vin, le fer なども同理である。

二七〇 Sens collectif distributif と云ふ方は個物といふことを考への中に置いて、全體を個物の集合と見て云ふひ方で les hommes, des hommes, des têtes d'hommes, les noms, une grande quantité de moutons, などの様に複數を意味する。  
其故 partitif の方は常に單數で(但し異種類のもの)が合へば複數となるけれど

二七一、

と) distributif の方は常に複数である。尚ほ此外に不定名詞 (substantifs indéfinis) といふものを置く人がある。これは autrui, personne, rien, les gens などいふ様な誰ともどれとも定まらぬ名を指すのである。それから一ひ substantifs accidentals といふを置く。之は本来名詞で無いものが偶々名詞と使用されるものをいふので Le manger, le boire, l'utile, le pourquoï, le comment, des mais, des si, des car などいふやうなのをいふのである。

二七三、

第二百六十四、五節と全く別の見方で名詞を二種にわけ、單名詞と結合名詞とが是である。單名詞といふは homme とか femme とか いふ様に唯一字の名詞をいふので、結合名詞といふは arc-en-ciel といふ様に二つ以上の語が結合して唯一語を形成つて居るものをいふのである。

二七四、

結合名詞を形成つて居る各語の間は連線第五十節参照で結合せねばならぬ。  
(明治三十四年三月九日發布の佛國文部省令にて、此規則を嚴密に守る必要は無いこととなつた。)

名詞の性 (Du genre des substantifs.)

二七五、

名詞の「性」といふことがある。これは男性とか女性とか言ふことを名詞に認めるので homme, cheval, taureau などと男性とし、femme, cavale, vache などと女性とする丈ならば極めて見易い區別で、又理にも合て居るがそれ斗りではない。佛蘭西語では凡ての無生物にも盡く男女性を附與するのである。實に道理上許すべきことではないが、去りとて今更奈何とも仕様がなない。唯可成規則立た方法の下に之を覚えてしまふより外は無ないのである。

希臘、羅甸、獨逸語などには男女性の外に中性(neutre)といふものを置いておるけれども、佛蘭西語には無い。

これから、男女性の區別を述べやう。

二七六、

男性の語の語尾斗りを變へて女性を作つた語が甚だ多い。即ち

二七七、

(一) 男性の語尾に無聲の。を付けたので女性となる(なつた語は次の様な語である。

男	性	女	性
Japonais		Japonaise	

Chinois	Chinoise
Allemand	Allemande
Espagnol	Espagnole
Français	Française
ami	amie
écolier	écolière
géant	géante
Justin	Justine
Louis	Louise
marquis	marquise
Persan	Persane

二七八、  
 (二) 男性の語の。を esse にかくて作つたもの(かくて作るもの)  
 abbé  
 comte  
 abbesse  
 comtesse

diable	diabliesse
druide	druidesse
hôte	hôtesse
maître	maîtresse
prêtre	prêtresse
prophète	prophétesse
tigre	tigresse 等

二七九、  
 (三) *teur* を *trice* 或は *tense* にかへて作つたもの(作るもの)  
*abréviateur*  
*accélérateur*  
*acteur*  
*admirateur*  
*adulateur*  
*compositeur*  
*abréviatrice*  
*accélératrice*  
*actrice*  
*admiratrice*  
*adulatrice*  
*compositrice*

conducateur	conductrice
conservateur	conservatrice
consiliaire	concliatrice
consolateur	consolatrice
corrupteur	corruptrice
créateur	créatrice
débiteur (dans le sens de dette)	débitrice
destructeur	destructrice
examinateur	examinatrice
exécuteur	exécutrice
fondateur	fondatrice
insulteur	insultatrice
inventeur	inventrice
lecteur	lectrice

médiateur	médiatrice
modérateur	modératrice
moniteur	monitrice
négociateur	négociatrice
novateur	novatrice
opérateur	opératrice
pacificateur	pacificatrice
persécuter	persécutrice
précepteur	préceptrice
protecteur	protectrice
régulateur	régulatrice
spectateur	spectatrice
tuteur	tutrice
versificateur	versificatrice

etc	etc
acheteur	acheteuse
fauteur	fauteuse
frotteur	frotteuse
porteur	porteuse
sauter	sauteuse
solliciteur	solliciteuse
souhaiter	souhaiteuse
etc	etc
(四) en なる 代へて 作ったもの(作るもの)	
arithméticien	arithméticienne
bourbonnien	bourbonnienne
Brésilien	Brésilienne

二六〇

capétien	capétienne
carlovingien	carlovingienne
cartésien	cartésienne
Chaldéen	Chaldéenne
chien	chiennne
chrétien	chrétienne
épicurien	épicurienne
gardien	gardienne
musicien	musicienne
Parisien	Parisienne
paroissien	paroissienne
plébéen	plébéienne
Vosgien	Vosgienne
etc.	etc.

二八二

男性と女性と全く異なつた形を持つて居る語

男性	女性	男性	女性
bélier	brebis	mari	femme
boeuf	vache	monsieur	madame
bouc	chèvre	neveu	nièce
bourdon	abeille	oncle	tente
cerf	biche	papa	maman
chapon	poularde	parrin	marraine
coq	poule	père	mère
cheval	ca vale	pigeon	colombe
Dieu	déesse	porc	truite
étalon	jument	cochon	
frère	sœur	verrat	reine
garçon	fille	roi	

二八三

此外語根は等しけれど語尾の稍變つたもの

gendre	bru	sanglier	laie
homme	femme	singe	guenon
jars	oie	taureau	vache
lièvre	hase	canard	cane
mâle	femelle	perroquet	perruche
loup	louve	mullet	mule
chameau	chamelle	levrier	levrette
chevreuil	chevrette	chat	chatte
agneau	agnelle	dindon	dinde
faisan	faisane 又 faisande	fls	fille etc.

これから凡ての名詞の性を知る方法を説かう。  
第一。意味によつて男女性を知る法



(Genre connu par le sens.)

男性 (masculin.)

二八三、

(一) 男又は男性の獸類を意味する語。

- |              |           |             |
|--------------|-----------|-------------|
| 例。 Un homme. | Le tigre  | Un Japonais |
| Le père.     | Le boeuf  | Un marchand |
| Le frère.    | Le cheval | Un scélérat |
| Le garçon.   | Le chat   | Un muet     |
| Le lion.     | L' oncle  | etc.        |

二八四、

(二) 日、月及季節の名。

- |                 |          |               |
|-----------------|----------|---------------|
| 例。 Le dimanche. | Janvier. | Un hiver.     |
| Le lundi.       | Février. | Le printemps. |
|                 |          | etc.          |

**注意** 月の名の前に mi-がつくと mi-aout とさみやうになれば女性となる。此 mi-がつけば他の語も皆女性となるのである。

又 L'automne は男性とも女性とも使へる。

二八五、

(三) 風の名

- |             |        |
|-------------|--------|
| 例。 Le nord, | Le sud |
|-------------|--------|

**例外** 此規則に二語の例外がある。左の二語は女性である。

- |          |                |
|----------|----------------|
| La bise, | La tramontane. |
|----------|----------------|

二八六、

(四) 金屬、鑛物及色の名

- |            |              |          |
|------------|--------------|----------|
| 例。 Le fer. | Le plomb.    | Le zinc  |
| Le platine | Le tombac    | Le rouge |
| Le noir    | L' incarnat. |          |

二八七、

(五) 山の名

- |               |              |             |
|---------------|--------------|-------------|
| 例。 Le Vésuve. | L' Apennin.  | Le Caucase. |
| Le Taurus.    | L' Himalaya. | Le Liban.   |
| L' Atlas.     | Le Fondji.   | etc.        |

**例外** 左に擧るものは此例外である。但し此例外は凡て複数にしか用ひられ

二八八、

(六) 草木の名

なしものしめることば記號あり。  
Les Alpes            Les Cordillères.    Les Pyrénées.  
Les Vosges.

例、

Un peuplier            Un pommier            Un rosier  
Un acacia              Un portier            Le chèvre-feuille.    etc.

【例外】左に挙ぐるものは例外である。

L'aubépine.            L'ébène.              L'épine.  
La ronce.              La palme.             La vigne.  
L'yeuse.

二八九、

(七) アルファベツ(イタ)の字。

m A.                    m B.                    m C.  
m D.                    等新式に従へば凡て男性である。

但し舊式では次の七字を女性とす。

F. H. L. M. N. R. S.

二九〇、

(八) 本數 (nombre cardinal) 及 十分數 (nomenclature décimale)。

例、 Le dix                    Un sept.                Un mètre  
      Le vingt.            Un décime.            Un kilo.                etc.

二九一、

(九) 性に關係なく全種類を指示する普通名詞。

例、 Un animal.            Le reptile              Le chat.  
      Un oiseau.            Un insecte              Le beau sex.  
      Un poisson,        Un chien.                etc.

【例外】左に挙ぐるものは例外である。

La bête.                La brute.

二九二、

(十) 凡ての形容詞、凡ての不定法働詞、及凡ての不變化語の名詞として使はるゝ時。

例、 Le bon.                    Le manger.              Le oui  
      Le mauvais.            Le boire.                Le non

二九三、  
(十一) 國郡及河の名の語尾が子音か或は a, e (e じな S) i, o, u の中の何れか一つで終つて居るもの。

例	Le beau,	Le peu.	Le pour et le contre.
	Le moi.	Le trop.	Le mais.
	Le toi.	Le pourquoï	etc.
例	Le Canada.	Le Malabar.	Le Portugal
	Le Chili.	Le Mogol.	Le Weser.
	Le Danemarck.	Les Pays-Bas.	Le Rhin
	Le Japon	Le Pérou	Le Maryland.
	Le Brésil.		etc.
例外	La Franche-Comté.	La March.	

女性 (Féminin.)

二九四、

(一) 女又は女性の獸類を意味する語。

例	Une femme.	La lionne.	La fille.
	Une mère.	Une tigresse.	La bru.
	La sœur.	Une vache.	etc.

二九五、

(二) 性質又は動作を表はす抽象名詞。

【注意】性質又は動作を表はす抽象名詞は多く次の様な語尾を持って居る。即ち *ance, ence, esse, eur, rie, ise, ion, té, ude, ure, ade.* である。尙第三百〇六節以下を参照せよ。

例	L'importance.	La diligence.	La patience.
	La vitesse.	La scélératesse.	La hardiesse.
	La douceur.	La valeur	La laideur.
	La barbarie,	La furie.	L'agonie.
	La bonté.	La vérité.	La facilité.
	L'inquiétude.	La sollicitude.	L'aptitude.

La culture.                    La conjecture.                    La bravoure.  
 La bravade.                    La jérémiade.                    etc.

【注意二】 Le courage は此例外と見るべきなれどもとく cœur から出た字にて其意味に用ゐられて居るところもあるから例外とは爲なり。

二九六、 (三) 菓實及花の名

例    Une orange.                    Une pêche.                    Une poire.  
       Une pomme.                    Une hyacinthe.                    Une rose.  
       Une tulipe.                    etc.

【例外】 左に擧るものは例外である。

Le narciss.                    Le chève-feuille.                    Le chou-fleur

(男性語尾の爲めに例外となるものが尙ほ少しある)

二九七、

(四) 國郡名及川名の無聲の。て終つて居るもの。(第二百九十三節参照)

例    La France.                    La Russie.                    La Tamise.  
       L' Italie.                    La Moselle.                    La Vistule.

L' Angleterre.                    La Meuse.                    La Turquie  
 La Seine.                    etc.

【例外】 左に擧るものは例外である。

Le Bengale.                    Le Rouergue.                    Le Rhône.  
 Le Maine.                    Le Boristhène.                    Le Tage.  
 Le Bigorre.                    Le Danube.                    Le Tibre.  
 Le Mexique.                    L' Ebre.                    Le Tigre.  
 Le Peloponèse.                    L' Euphrate.                    Le Gange.  
 Le Perche.

第二。語尾によつて男女性を知る法。

(Genre connu par la terminaison.)

二九八、  
 二十五のアルファベットの内のJとVとの二字を除いた外は凡て語尾となつて居る。其内十一字は全く男性斗りの語尾となつて居て残りの十二字が男女兩性の字

二九九、  
 の語尾となつて居るのである。  
 其十二字の外にもが加はつて之も亦男女兩性の語尾となつて居るといふことを忘れてはならない。

三〇〇、  
 男女兩性の語尾となつて居る十三字の中の、*x*を語尾に持て居る語の数が二十一あつて、其十二が男性で九が女性である。即ち、

choix	chaux
coutroux	croix
crucifix	faux
époux	noix
faix	paix
Aux	perdrix
houx	poix
phénix	tonx
prix	voix

} 男性.

} 女性.

合計二十一語の中、語尾の *x* を發音するものは唯 *phénix*, *thorax* の二語有りである。

男性の語の語尾キリに付く十一字は B O D G H K L P O Y N である

- 三〇一、  
 例。 B..... *plomb*.
- C..... *bac, bee, banc, sac, tabac, tromc.*
- D..... *nid, bond, bord, dard, lard.*
- G..... *rang, sang, orang-outang, zigzag, poing, coing.*
- H..... *almanach, luth, punch, etc.*
- K..... *arack, beefsteak, carrick, etc.*
- L..... *bal, bol, sel, sol, calcul, etc.*
- P..... *camp, champ, coup, drap, sirop, etc.*
- Q..... *coq, cinq, etc.*
- Y..... *jury, tilbury, poney.*

三〇二、  
 残りの十二字即ちA、I、O、U、F、M、S、T、R、N、É、Eの内終りのR、N、É、Eを除いた  
 あとの八字を語尾に持て居る語の性も直ちに決することが出来る。即ち、  
 三〇三、  
 左に掲ぐる丈の例外を(即ち女性を除き去ればA、I、O、U、F、M、S、Tを語尾に持て  
 居る語は凡て男性である。

〔例外第一〕Aの語尾を有する女性名詞(八語)

agua-linta, canarilla, mazurka,  
 sépia, razzia, tombola,  
 véranda, villa.

〔例外第二〕Iの語尾を有する女性名詞(六語)

après-midi, foi, fourmi,  
 loi, merci, paroi.

〔例外第三〕Uの語尾を有する女性名詞(六語)

bru (第百九十九頁参照), eau, glu,

〔例外第四〕Oの語尾を有する女性名詞(二語)

peau, tribu, vertu,  
 quasinodo, virago.

〔例外第五〕Fの語尾を有する女性名詞(三語)

clef, nef, soif.

〔例外第六〕Mの語尾を有する女性名詞(一語)

faim.

〔例外第七〕Sの語尾を有する女性名詞(四語)

brehis, fois, souris (鼠を意味する時は男性)  
 vis (糸を縫う時)

右の四語は單數文字斗りを擧げたものなれど、若し之に複數斗りに用ゐら  
 れる文字で (meurs, ténébres, monchettes の様に) 其爲語尾にsを持て居る文  
 字を加ふるとすれば此上尙ほ二十二字斗りを擧ぐる必要がある。シカシ、其  
 二十二字が必ずしも皆複數斗りに用ゐらるゝといふ嚴格な規則がある

譯でもなく随つて語尾にsを取らない場合もあるのだから其方は今舉げ  
なす。

【例外第八】の語尾を有する女性名詞(十語)

- |                   |             |       |
|-------------------|-------------|-------|
| dent,             | forêt,      | gent, |
| hart,             | jument,     | mort, |
| nuit(minuit は男性), |             | part, |
| plupart,          | quote-part, |       |

三〇四、

残り四字R, N, E, E)の内, Rの語尾を持つ語の性を定めることも容易である。之を  
容易にするには、先づ此Rで終る語を二分して、一方にはeurと續いてrで終  
る語を置き、他方にはeur以外にrで終る語を置くと假定すればよい。

三〇五、

扱其eur以外にrで終る語は、左に舉る例外を除き去れば他は盡く男性名詞で  
ある。

【例外】eur以外にrで終る女性名詞(五語)

- |       |      |     |
|-------|------|-----|
| chair | cour | mer |
|-------|------|-----|

三〇六、

又eurと續いてrで終る語の中、左に舉る十語を除き去れば他は盡く女性名詞  
である。(尚ほ第二百九十五節の注意一を参照すべし)。professeur, tailleurなどの様  
な意味で男性とわかる語は例外の中に加へる必要も無からう。

【例外】eurの語尾を持つ男性名詞(十語)

- |             |             |          |
|-------------|-------------|----------|
| coeur,      | choeur,     | bonheur, |
| honneur,    | deshonneur, | malheur, |
| équateur,   | labreur,    | pleur,   |
| chou-fleur, |             |          |

右の十語の中、pleurは複数の字で、大抵pleursと斗り書くからsの語尾を  
持つ語と見做して此内から除いても宜しい。又chou-fleurは結合名詞の規則  
によつて男性となつたものと思つて支障ない。第三百二十七節以下五節參  
照)

三〇七、

残り三字(N, E, E)の中、Nを語尾に持つ居る語の性を定めることも大した困難

三〇八、  
なことではない。之も矢張Rの場合のやうに、一方に ion 及び son の語尾を持つて居る語を置き、他方に其以外の n の語尾を持つて居る語を置くと假定すればより、ion 及び son 以外に n で終る語は、左に擧る例外を除けば他は皆男性名詞である。

〔例外〕 ion 及び son 以外に n で終る女性名詞。

- |        |         |         |
|--------|---------|---------|
| fagon, | fin,    | legon,  |
| main,  | rangon, | guenon. |
- (及 fagon の結合名詞 malafagon, contrefagon.)

三〇九、 ion で終る名詞の中左の例外を除けば他は盡く女性である。

〔例外〕 ion で終る男性名詞。

- |         |           |          |
|---------|-----------|----------|
| pcion,  | scion,    | bastion, |
| camion, | champion, | lampion, |
| fanion, | gabion,   | galion,  |
| talion, | gavion,   | tandion, |

- |             |           |              |
|-------------|-----------|--------------|
| grouppion,  | scorpion, | septentrion, |
| million,    | billion,  | trillion,    |
| brimborion. |           |              |

三一〇、 son で終る名詞の中左の例外を除けば他は盡く女性である。

〔例外〕 son で終る男性名詞。

- |         |               |         |
|---------|---------------|---------|
| blason, | peson,        | sison,  |
| tison,  | groison,      | oison,  |
| poison, | contrepoison, | tesson, |
- poisson(第二百九十一節参照)

三一一、 残り二字(E, E)の内、E で終る名詞の性を定むることも敢て困難でない。之もRとNの場合の様に二つに分つて考へれば宜しい。E, E と續くものを一方に置き、其他のもで終る名詞を他方に置くとして。

三一二、 以て終る名詞は僅かに四語しか無くて、盡く女性である。即ち、

- |         |           |         |        |
|---------|-----------|---------|--------|
| amitié, | inimitié, | moitié, | pitié. |
|---------|-----------|---------|--------|



三二三、

て終る名詞も、左の例外を除けば他は盡く女性である。

(此一節は第二百九十五節に關係を持て居る)

【例外】て終る男性名詞。

aparté,	arrêté,	comté,
comité,	côté,	pâté,
traité,	été,	veloute,
bénédicté,	doigté,	

(以上の語の中 comté はもと女性であつた。今でも la Tranche-Comté とする。)

三二四、

て以外に、て終る名詞は残らず男性である(唯固有名詞には、て終る女性の字が十五六もあらうか。)

三二五、

今や残るところは唯E一つとなつたところが此無聲のeを語尾に持て居る字は男女性を通じて非常に多いので、此に就て性を分つ規則を定めることが中々困難である。

實にブラシエが其歴史的文献に於て述べた如く、リットレが又之を賞賛した如く、文字

三二七、

を説き文法を解釋する最良法は其歴史に據るにあるならむ。假令ば此無聲のeを語尾とする凡ての名詞の男女性を分つに際しても、羅甸語の男性及中性より直接に轉來したる凡ての名詞は果實の名を除き盡く男性なり」と説き去るを尤も便利とするならむ。去れど斯く説き去つて美事其功を奏するものならば、斯程無造作なことはなく、男女性を説明するに就ての困難の大部分は此一言によつて除くことを得るであらう。けれども、斯様なことは羅甸語に慣たる佛蘭西人、伊太利人、特に其學者社會にこそ實際の功を奏すれ、我々日本人に取ては、恰かも謎語を説くに一層入組たる謎語を以てせられた様で、何の得るところも無いのである。故に、不完全ながらも、佛蘭西語其者に就て、可成理會し易い方法を取て、其を説明するより外仕方がない。

三二六、

一般の規則をいへば、無聲のeは、之を語尾として居る語の發音を和らげ、之を流暢優美にするから、女性名詞の符となるのである。

けれども、其働きのある爲めに、男性名詞の多くも亦之を自分の方に引きつけて居るから、其間の區別が甚だ困難であるのである。

三二八、  
 それ故、多少完全に其區別をしやうと思ふには、此の二様の働らき女性の符號となる働きと、發音を和らげるといふ働きを暫時度外に置いて、eの前に續く文字の相違によつて、eを語尾とする凡ての名詞を二大分するのが最良の方法である。

三二九、  
 eを綴りの最後に持つ男性語尾は左に擧ぐる十二である。

ABE	AGE		OIRE
	EGE	ENE	
ACLE	IGE	ISNE	EUILLE
	OGÉ	OEN(AUNIEを含む)	
	UGE		

先づ之を述べて次に女性名詞の方に移らう。

三三〇、  
 右の十二語尾の中、UGE, ISNE, OEN(AUNIE并)の何れかを語尾とする凡ての名詞は盡く男性である(例外なし)

三三一、  
 残りの九つの中、ABE, ACLE, EGE, EUILLEの何れかを語尾とする凡ての名詞は

(唯一語宛の例外を除けば盡く男性である。)

【例外】 ABE	の例外(女性)1つ	syllabe.
ACLE	の例外(女性)1つ	débaule.
EGE	の例外(女性)1つ	allége.
EUILLE	の例外(女性)1つ	feuille.

三三二、  
 又其残りの五つの語尾即ち AGE, IGE, OGE, ENE, OIREの中の何れかを語尾とする凡ての名詞は左に列記する例外を除けば、盡く男性である。

【例外】 ageを語尾に持つ女性名詞

cage,	image,	page,
rage,	nage,	plage.
passerage,	saxifrage.	

【例外】 igeを語尾に持つ女性名詞

tige,	volige,	volige,
strige,	calige.	

baige, neige. (此二語は發音の上からいへば寧ろ ége の例外中に入るべきもの)

例外三 oge を語尾に持つ女性名詞

horloge, paragoge, toge,

loge.

例外四 éme を語尾に持つ女性名詞

brême, crème, trîème.

例外五 oire を語尾に持つ女性名詞

armoïre, gloire, écritoire,  
histoire, râloïre, mâchoïre,  
mémoire, nageoire, passoire,  
poïre, victoire, bouilloïre,  
bassinôïre.

三三三

e を綴りの最後に持つ女性語尾 の主なるものは左に掲ぐる十七である。

AOE, ADE, LLE,

ANCE(ANSE, ENCE, ENSE 共), UDE, NME,  
AZE(ASE 共), URE, NNE,  
ÈSE(AISE 共), UE, RRE,  
ISE, ÉE, SSE,  
IE, TPE.

三三四

左に列記する例外を除けば右の十七語尾の何れかを語尾とする凡ての名詞は盡く女性である。

例外一 ace を語尾に持つ男性名詞

espace.

例外二 ance(anse, ence, ense 共)を語尾に持つ男性名詞

rance, silence.

例外三 aze (ase 共)を語尾に持つ男性名詞

gymnase, vase, vkase.

例外四 ese(aise 共)を語尾に持つ男性名詞

dièse,	diocèse,	molaise,
mésaise,		

【例外五】iseを語尾に持つ男性名詞。

remise (貸馬車を意味する時)

【例外六】adeを語尾に持つ男性名詞。

grade,	stade,	jade.
--------	--------	-------

【例外七】udeを語尾に持つ男性名詞。

prélude.

【例外八】ireを語尾に持つ男性名詞。

angure,	mercure,	murmure,
---------	----------	----------

parjure,

tellure.

【例外九】reを語尾に持つ男性名詞。

cantique,	émétique,	soliloque,
-----------	-----------	------------

casque,	manque,	lopique,
---------	---------	----------

catalogue,	masque,	tropique,
colloque,	narcotique,	viatique,
dialogue,	pique,	
disique,	portique,	
dogue,	risque,	

【例外十】eを語尾に持つ男性名詞

allée,	trophée,	pygnée,
--------	----------	---------

musée,	hymnée,	scarrabée,
--------	---------	------------

mausolée,

coryphée.

(此等の例外は皆希臘語より來りし字なることに注意せよ)

【例外十一】ieを語尾に持つ男性名詞。

foie,	paraplume,	Messie,
-------	------------	---------

génie,

périthélie,

incendie,

pavie,